

表 3.2.3 地点別の植物確認種 (6/6)

No.	目名	科名	種名	調査地点				
				保存 緑地	回復 森林	回復 緑地	親水 公園	公園
339	キク	キク	オオアレチノギク					○
340			ツワブキ	○	○			
341			ハキダメギク	○	○			
342			ウラジロチチコグサ					○
343			チチコグサ					○
344			オオジシバリ	○				○
345			アキノノゲシ		○		○	○
346			ヤブタビラコ	○				○
347			ムラサキニガナ			○		
348			コウヤボウキ	○				
349			フキ		○	○	○	○
350			コウゾリナ					○
351			ハハコグサ			○		
352			セイタカハハコグサ					○
353			セイタカアワダチソウ	○	○	○	○	○
354			オニノゲシ		○			
355			ノゲシ		○	○		○
356			セイヨウタンポポ				○	○
357			カントウタンポポ					○
358			アカオニタビラコ				○	○
359			アオオニタビラコ			○		○
360	セリ	トベラ	トベラ	○	○		○	○
361		ウコギ	カクレミノ	○				
362			ヤマウコギ	○				
363			ヤツデ	○	○		○	○
364			カナリーキツタ					○
365			キツタ	○	○	○	○	○
366			ノチドメ				○	○
367			オオチドメ					○
368			チドメグサ					○
369			ハリギリ	○				
370		セリ	アシタバ	○	○	○		
371			ツボクサ		○		○	○
372			ミツバ	○		○		
373			マツバゼリ				○	○
374			セリ	○			○	○
375			ヤブニンジン	○		○		
376			オヤブジラミ		○			
377	マツムシソウ		ガマズミ	ニワトコ	○		○	
378		ガマズミ		○		○		
379		サンゴジュ					○	○
380		スイカズラ	スイカズラ	○	○	○	○	○
381			ハコネウツギ		○			
合計44目98科381種				216種	157種	70種	113種	213種

注1) 科名・種名・配列は原則として『河川水辺の国勢調査のための生物リスト「令和6年度生物リスト」』
(国土交通省河川環境データベース、令和6年10月)に従った。

ロ. 植栽の生育状況

調査範囲の植栽の生育状況について、樹林の乾燥化の影響や林外からの草本種の混入、林縁植生の形成状況及び生育状況を確認した。事業実施に伴う分断や断片化による乾燥化が想定されることから、まず林内湿度の状態に着目した。ここでは、適潤～湿生植物（例えば湿った場所に生育するシダ類等）、及び直射日光や風から林内を保護する林縁植物（例えば林縁部に生育するアケビやヤマグワ、オオバヤシャブシ等）の出現状況の把握により、林内の乾燥化の状態を間接的に評価することとした。なお、適潤～湿生植物及び林縁植物は、「神奈川県植物誌 2018 電子版」（神奈川県植物誌調査会 編 2018）、「日本植生便覧」（奥田重俊・望月陸男 編 1983）等を参考にした。

調査範囲の樹林地では、表 3.2.4 に示すとおり 59 種の適潤～湿生植物が確認された。これは全確認種数の 15%程度に相当する。この中には一般に陰湿地を好むシダ植物が 20 種以上含まれ、ニリンソウのような湿生林の林床に生育する早春植物もみられた。これらの多くは保存緑地で確認されたが、回復森林でもその半数程度の 23 種が確認された。

次に林縁植物については、表 3.2.5 に示すとおり 51 種が確認された。それらの中にはオニドコロ、アケビ、ミツバアケビ、ヤマグワ、コゴメウツギ、オオバヤシャブシ、マユミ、エノシマキブシ、ウツギ、ムラサキシキブ、ニワトコ、ガマズミ、ハコネウツギ等の三浦半島周辺で報告されている林縁植物（「逗子市の植生」（宮脇他 1971）、「葉山地区周辺の植生」（宮脇・中村 1982））が共通して含まれており、調査範囲の林縁植生が健全であることを示唆するものであった。また林縁植物は、回復森林でも多く確認されており、今後の持続的な林縁植生の形成を予測させるものであった。

以上から、調査範囲の樹林における植物相及び林縁植生は健全な状態にあり、樹林内の著しい乾燥化や林外からの草本種の顕著な混入は生じていないものと考えられる。

表 3.2.4 樹林地における適潤～湿生植物の出現状況

No.	種名	回復 森林	保存 緑地	No.	種名	回復 森林	保存 緑地
1	ゼンマイ		○	31	エビネ		○
2	フモトシダ		○	32	コ克蘭		○
3	オオバノイノモトソウ		○	33	ヤブラン	○	○
4	ハチジョウシダ		○	34	ノシラン		○
5	マツサカシダ		○	35	ナガバジャノヒゲ	○	○
6	ミドリヒメワラビ		○	36	ナルコユリ		○
7	ホシダ	○	○	37	アマドコロ	○	
8	ミゾシダ	○	○	38	ヤブミョウガ	○	○
9	コモチシダ		○	39	ミョウガ		○
10	イヌワラビ		○	40	ドジョウツナギ		○
11	リョウメンシダ		○	41	ニリンソウ		○
12	ナガバヤブソテツ		○	42	ケヤキ	○	○
13	オニヤブソテツ	○	○	43	ムクノキ	○	○
14	テリハヤブソテツ		○	44	エノキ	○	○
15	ヤマイタチシダ		○	45	ヤマグワ	○	○
16	ベニシダ	○	○	46	アオミズ	○	○
17	ベニオオイトチシダ		○	47	イラクサ		○
18	キンキイタチシダ	○	○	48	ダイコンソウ		○
19	クマワラビ		○	49	ハンノキ		○
20	オクマワラビ		○	50	コクサギ		○
21	アイノコクマワラビ		○	51	ミズヒキ		○
22	アスカイノデ	○	○	52	ミゾソバ		○
23	ドクダミ	○	○	53	ミズキ	○	○
24	フウトウカズラ		○	54	クマノミズキ	○	○
25	タブノキ	○	○	55	アオキ	○	○
26	シロダモ	○	○	56	ナガバハエドクソウ	○	
27	ウラシマソウ	○	○	57	シロヨメナ		○
28	チゴユリ		○	58	ヤマウコギ		○
29	ヤマユリ		○	59	ヤブニンジン		○
30	ホトトギス		○	-	合計 59 種	23 種	57 種

注) 種名欄の網掛け表示はシダ植物を示す。

表 3.2.5 樹林地における林縁植物の出現状況

No.	種名	回復 森林	保存 緑地	No.	種名	回復 森林	保存 緑地
1	カニクサ	○	○	27	クサイチゴ		○
2	オオバウマノスズクサ		○	28	モミジイチゴ	○	○
3	ヤマノイモ	○	○	29	ナワシロイチゴ	○	
4	オニドコロ	○	○	30	オオバヤシャブシ	○	○
5	サルトリイバラ	○	○	31	カラスウリ		○
6	シオデ		○	32	ツルウメモドキ	○	○
7	アズマネザサ	○	○	33	マユミ	○	○
8	キボウシノ	○		34	アカメガシワ	○	○
9	メダケ	○	○	35	ゴンズイ		○
10	アケビ	○	○	36	エノシマキブシ	○	○
11	ミツバアケビ	○	○	37	ヌルデ	○	
12	アオツヅラフジ	○	○	38	カラスザンショウ	○	○
13	センニンソウ	○	○	39	ウツギ		○
14	ノブドウ	○	○	40	マルバウツギ		○
15	ヤブカラシ	○	○	41	ヘクソカズラ	○	
16	エビヅル	○	○	42	クコ	○	○
17	ヤブマメ		○	43	ヒヨドリジョウゴ		○
18	クズ	○	○	44	オオバイボタ		○
19	フジ	○	○	45	ムラサキシキブ		○
20	アキグミ	○		46	クサギ		○
21	カナムグラ	○	○	47	ヤマウコギ		○
22	ヒメコウゾ	○	○	48	ニワトコ		○
23	イヌビワ	○	○	49	ガマズミ		○
24	ヤマグワ	○	○	50	スイカズラ	○	○
25	コゴメウツギ	○	○	51	ハコネウツギ	○	
26	ノイバラ	○	○		合計 51 種	36 種	45 種

ハ. 重要種

現地調査で確認された種のうち、表 3.2.6 に示す法令や文献・資料等により指摘されている種を重要種とした。その結果、表 3.2.7 に示す 4 種が確認された。このうち、環境影響予測評価書における注目すべき植物種として、エビネとコ克蘭の 2 種が確認された。重要種の確認地点は図 3.2.1 に、生態情報及び確認状況は表 3.2.8 に示すとおりである。

表 3.2.6 重要種の選定基準

選定基準	
①	「文化財保護法」(昭和 25 年、法律 214 号)における天然記念物及び特別天然記念物
②	「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(平成 3 年、法律 75 号)における国内希少野生動植物及び国際希少野生動植物
③	「環境省レッドリスト 2020 の公表について」(環境省、令和 2 年 3 月)の掲載種
④	「神奈川県レッドデータブック 2022 植物編」(神奈川県環境農政局緑政部自然環境保全課・神奈川県立生命の星・地球博物館編、令和 4 年 3 月)の掲載種
⑤	「佐島の丘開発事業環境影響予測評価書」(京浜急行電鉄株式会社、平成 12 年 12 月)において注目すべき種とされた種 エビネ、コ克蘭、ヨメナ

表 3.2.7 重要種(植物)

No.	目名	科名	種名	選定基準				
				①	②	③	④	⑤
1	ウラボシ	イノモトソウ	ハチジョウシダ				EN	
2	クサスギカズラ	ラン	エビネ			NT	NT	●
3			コ克蘭					●
4	イネ	カヤツリグサ	アイノコシラスゲ				CR	
合計 3 目 3 科 4 種				0 種	0 種	1 種	3 種	2 種

注) 重要種選定基準及び評価区分は以下のとおりである。

①特天：国指定特別天然記念物 国天：国指定天然記念物

②国内：国内希少野生動植物種特定：特定国内希少野生動植物種緊急：緊急指定種

③EX：絶滅 EW：野生絶滅 CR：絶滅危惧 IA 類 EN：絶滅危惧 IB 類 VU：絶滅危惧 II 類 NT：準絶滅危惧 DD：情報不足 LP：絶滅のおそれのある地域個体群

④EX：絶滅 EW：野生絶滅 CR+EN：絶滅危惧 I 類 CR：絶滅危惧 IA 類 EN：絶滅危惧 IB 類 VU：絶滅危惧 II 類 NT：準絶滅危惧 DD：情報不足、要：要注意、減：減少種、希：希少種、注：注目種、不：不明種、LP：絶滅のおそれのある地域個体群

⑤注目すべき種

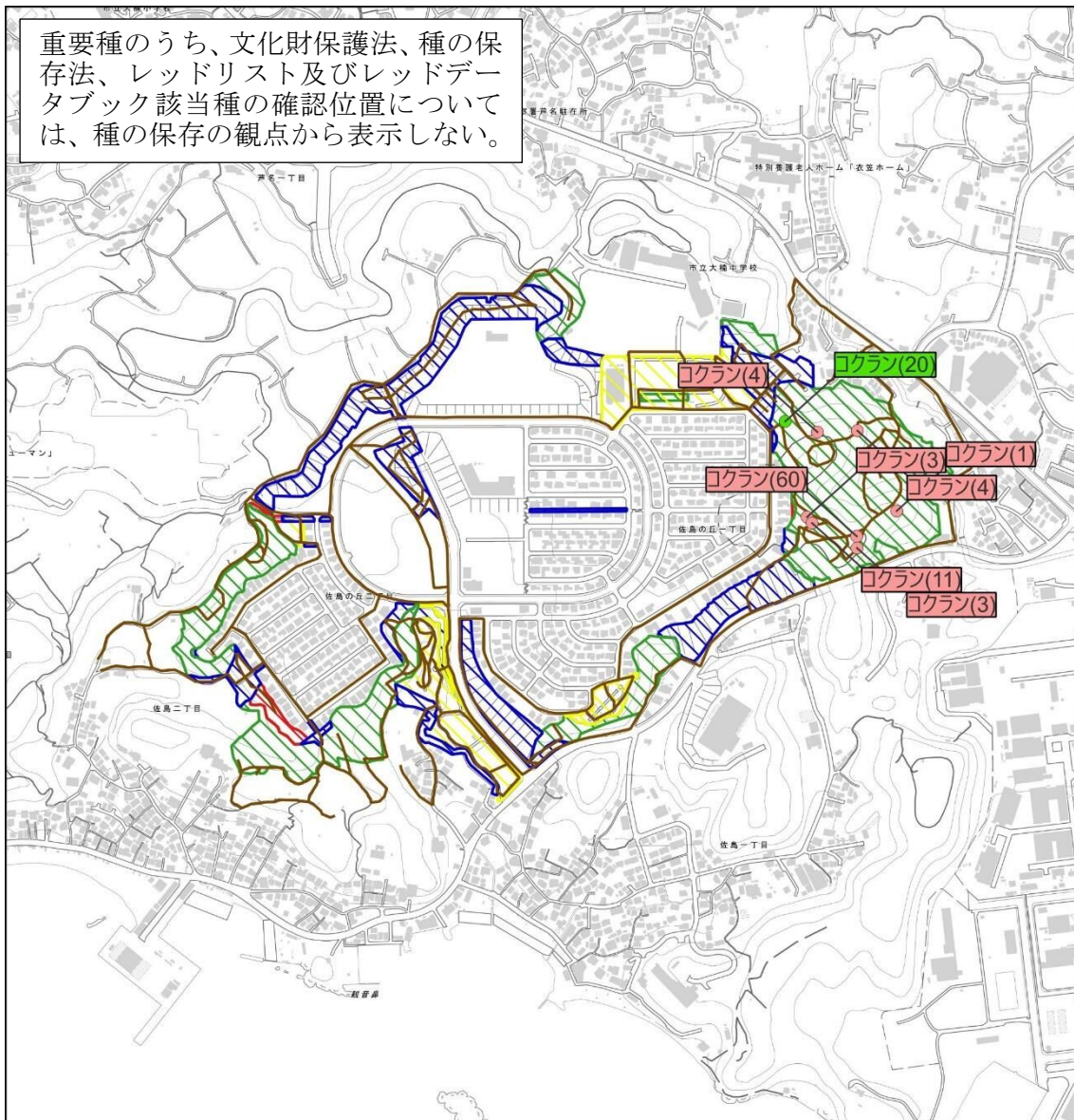


図 3.2.1 重要種確認地点（植物相）

表 3.2.8 確認された重要種の生態情報及び確認状況（1/4）

ハチジョウシダ（イノモトソウ科）		
指定状況	県 RDB：絶滅危惧 I B 類	 令和 6 年 4 月 16 日撮影
種の概要	常緑性。葉柄下部は赤褐色で上部はわら色。葉身は 2 回羽状で、葉は硬く光沢があり、胞子嚢群のつかない部分は全縁、上面の羽軸と小羽軸の交点付近に突起があったりなかったりする。県内では小田原市と南足柄市、横須賀市に記録がある。	
分布	本州（神奈川県以西の太平洋側）・四国・九州・琉球に分布する。	
確認状況	春季に保存緑地の樹林内で 5 個体が確認された。 夏季は確認されなかった。	

表 3.2.8 確認された重要種の生態情報及び確認状況（2/4）

エビネ（ラン科）		
指定状況	国 RDB：準絶滅危惧 県 RDB：準絶滅危惧 予測評価書：注目すべき種	 令和 6 年 4 月 16 日撮影
種の概要	常緑性。葉は 2～3 枚、楕円形で根生し無毛。花茎は高さ 20～40cm。花期は 4～5 月。山野の樹林内に生え、良好な生育地では群生することが多い。県内では広く雑木林、杉林、竹林に散在する。	
分布	北海道（西南部以南）・本州・四国・九州・琉球に分布する。	
確認状況	春季に保存緑地の樹林内 6 地点で 119 個体が確認された。 夏季は本種の開花・結実期ではないため、同定できる個体は少なかったものの、保存緑地の樹林内 1 地点で 2 個体が確認された。	

表 3.2.8 確認された重要種の生態情報及び確認状況 (3/4)

コ克蘭（ラン科）		
指定状況	予測評価書：注目すべき種	 令和 6 年 4 月 16 日撮影
種の概要	地上生。葉は広楕円形で 2～3 枚を偽球茎の頂きに接近してつける。花茎は高さ 15～30cm。花期は 6～7 月。花は花茎に 5～10 個つけ暗紅紫色。常緑広葉樹林の林床に生え、県内では丹沢、箱根を除いた丘陵から山麓に広く散在する。	
分布	本州（福島県以南）・四国・九州・琉球に分布する。	
確認状況	春季に保存緑地の樹林内の 7 地点で 86 個体が確認された。 夏季に保存緑地の樹林内 1 地点で 20 個体が確認された。	

表 3.2.8 確認された重要種の生態情報及び確認状況 (4/4)

アイノコシラスゲ（カヤツリグサ科）		
指定状況	県 RDB：絶滅危惧 I A 類	 令和 6 年 4 月 15 日撮影
種の概要	匍匐根茎があり茎は高さ 30～80cm。葉は下面が粉白を帯びる。花穂は柄が短く、雌花穂は互いに離れてつき、直立または斜上する。河川の高水敷等に生える。県内では三浦半島と寒川町に記録がある。	
分布	本州・四国に分布する。	
確認状況	春季に保存緑地及び回復森林の樹林内 4 地点で 136 個体が確認された。夏季は本種の開花・結実期ではないため、同定できる個体は確認されなかった。	

(2) 植生

イ. 植生調査

調査範囲に成立している主要な植生単位は、イノデータブノキ群集など9群落が区分された。

保存緑地では、事業実施前から維持されてきたイノデータブノキ群集、マテバシイ群落、オニシバリーコナラ群集のほか、アカメガシワーカラスザンショウ群落、マダケ植林が区分された。回復森林では、クヌギ、コナラ、オオシマザクラ、カラスザンショウ等の郷土種やシイ、カシ、タブ等の潜在自然植生種による森林再生を目標とした樹林が造成されており、それらは常緑広葉樹植林として区分された。植林以外の場所ではススキ群落が成立していた。回復緑地はアカメガシワーカラスザンショウ群落や植栽地となっていた。公園は多目的公園と親水公園が造成され、後者では移植されたタチヤナギ群落や創出された湿地環境であるヨシ群落が認められた。

ロ. 群落構造

調査範囲に成立している主要な植物群落の群落構造は表 3.2.9 に示すとおりである。また、植生断面図作成地点を図 3.2.2 に、それらの群落断面模式図を図 3.2.3(1)～(9)に示した。

表 3.2.9 調査範囲に成立する主要な植物群落の概況

植物群落	成立立地	群落高(m)	おもな生育種		
			高木層・亜高木層	低木層	草本層
イノデータブノキ群集	丘陵斜面	16	タブノキ、ヤブニッケイ、シロダモ	アズマネザサ、アオキ、タブノキ	アズマネザサ、テイカカズラ、イタビカズラ
マテバシイ群落	丘陵斜面	16	マテバシイ、ケヤキ	マテバシイ、イヌビワ、アオキ	ヤブコウジ、ツワブキ、ウラシマソウ
タチヤナギ群落	湿地(移植地)	4	—	タチヤナギ	セイタカアワダチソウ、ヨシ、カササゲ、セリ
オニシバリーコナラ群集	丘陵地の尾根～斜面	14	コナラ、オオシマザクラ、ハゼノキ	アズマネザサ、コゴメウツギ、イヌビワ	コウヤボウキ、テイカカズラ、トベラ
アカメガシワーカラスザンショウ群落	丘陵地の斜面から谷	12	カラスザンショウ、エノキ、ヤマグワ	アズマネザサ、エノキ、フウトウカズラ	フウトウカズラ、トキワツユクサ、アスカイノデ
マダケ植林	丘陵斜面	13	マダケ	アオキ、イヌビワ、ヤツデ	トキワツユクサ、アオキ、ウラシマソウ
常緑広葉樹植林	造成法面	6	スダジイ、タブノキ、アラカシ、ヌルデ	アズマネザサ、ミツバアケビ	スギナ、オニヤブソテツ、ヤブカラシ
ススキ群落	造成地	0.9	—	—	ススキ、セイタカアワダチソウ、ヒメジョオン
ヨシ群落	親水公園の湿地	2	—	—	ヨシ、カササゲ、セイタカアワダチソウ、セリ

注) 太字は各階層における優占種、下線は導入された植栽樹種を示す。

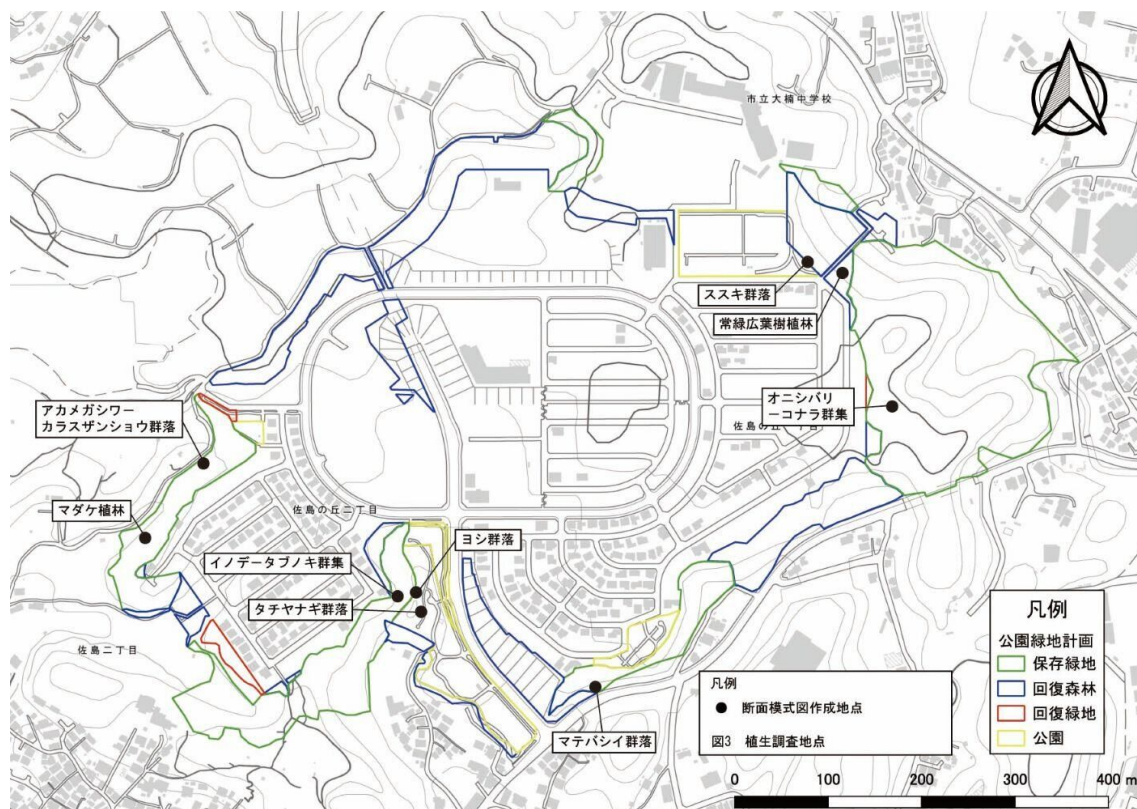


図 3.2.2 植生断面図作成地点



図 3.2.3(1) 群落断面模式 イノデータブノキ群集

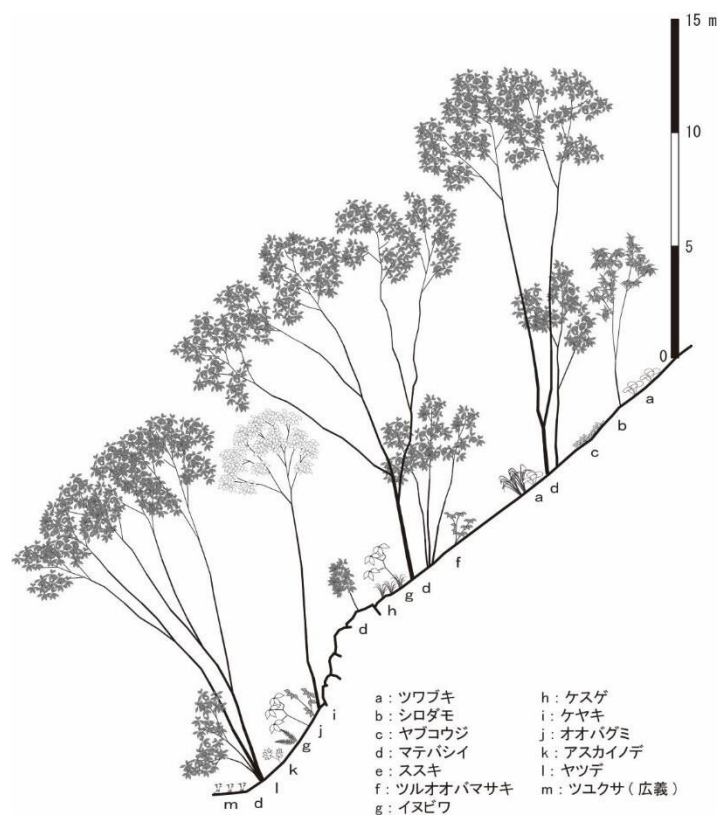


図 3.2.3(2) 群落断面模式 マテバシイ群落

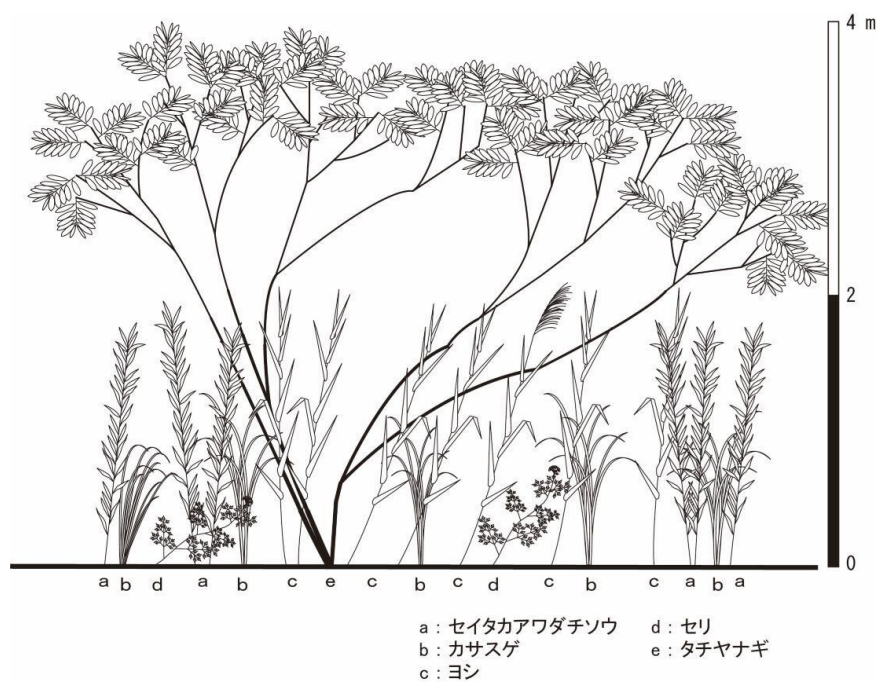


図 3.2.3(3) 群落断面模式 タチヤナギ群落

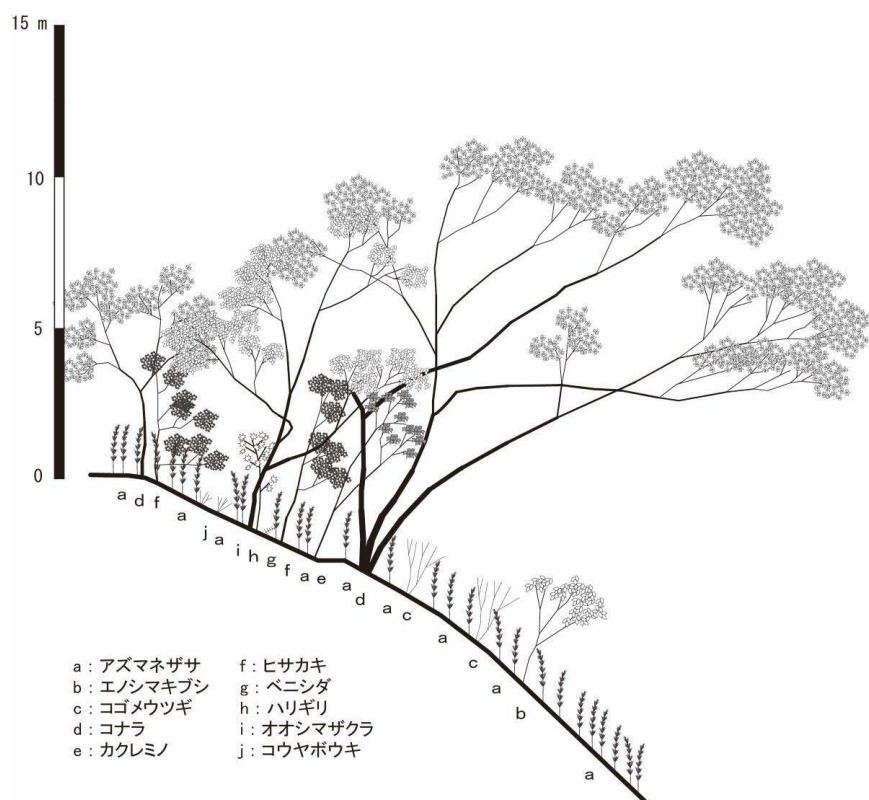


図 3.2.3(4) 群落断面模式 オニシバリーコナラ群集

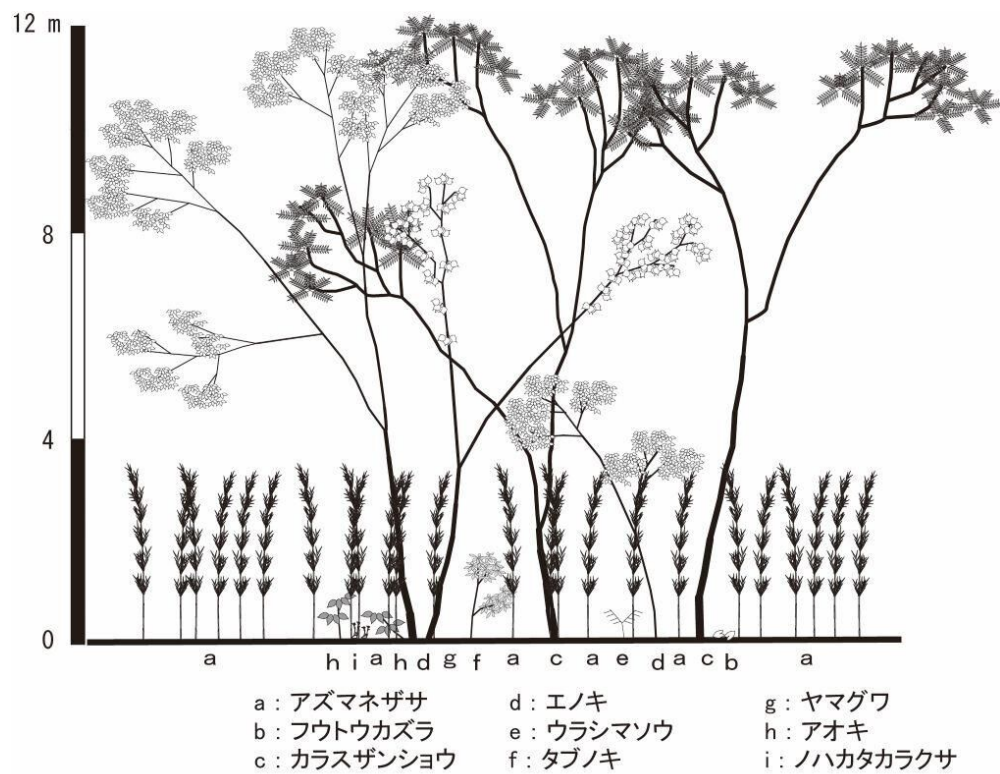


図 3.2.3(5) 群落断面模式 アカメガシワーカラスザンショウ群落

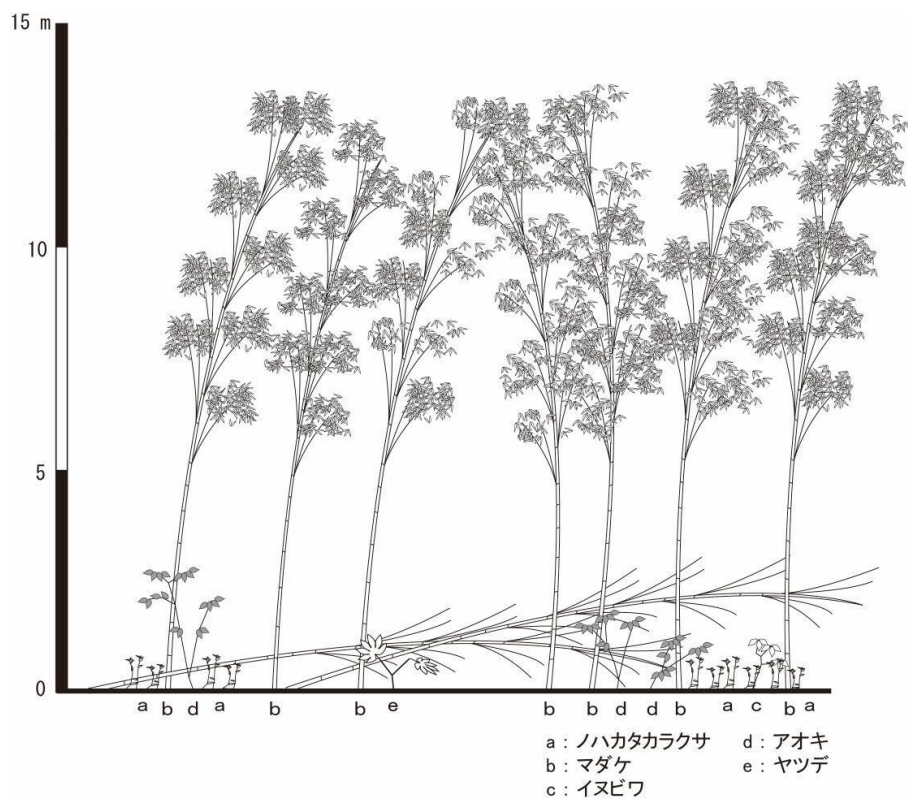


図 3.2.3(6) 群落断面模式 マダケ植林

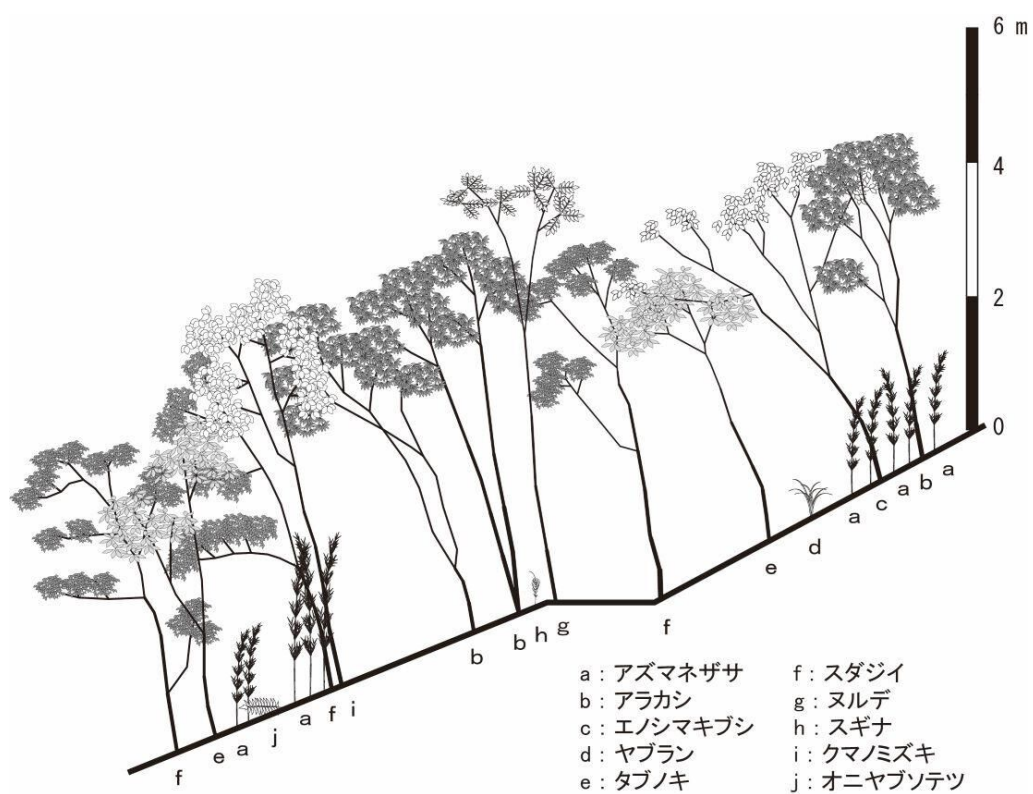


図 3.2.3(7) 群落断面模式 常緑広葉樹植林

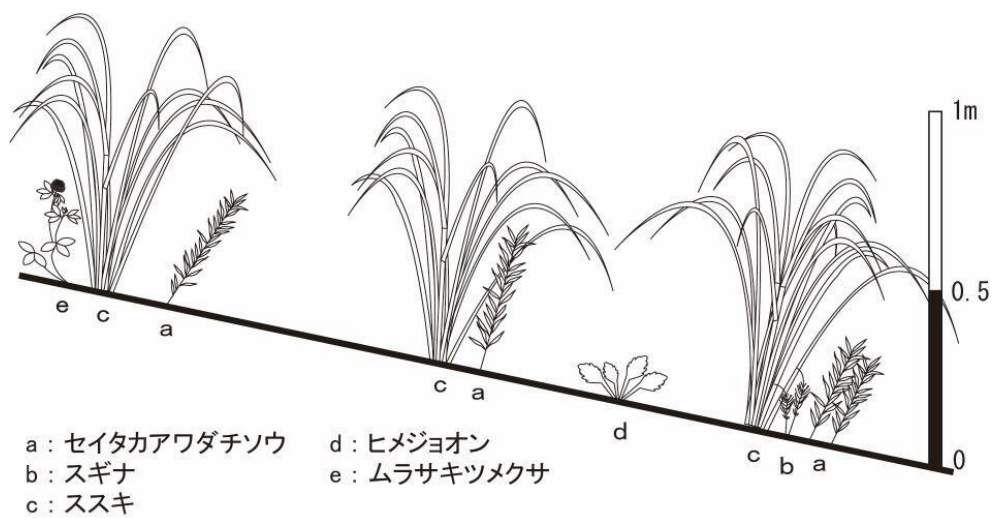


図 3.2.3(8) 群落断面模式 ススキ群落

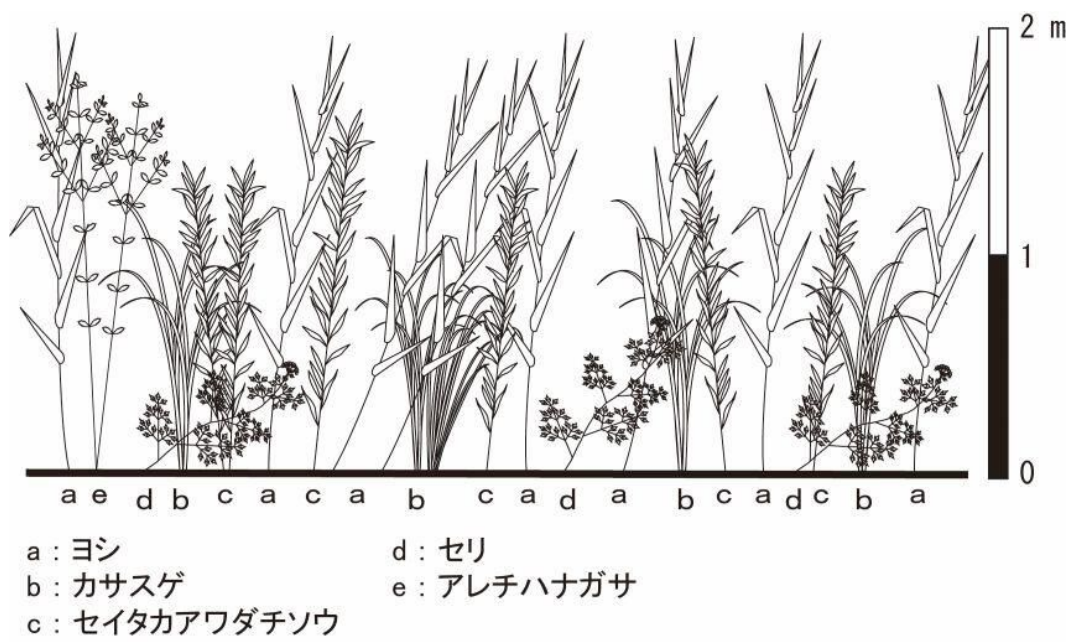


図 3.2.3(9) 群落断面模式 ヨシ群落

ハ. 重要な植物群落

現地調査で確認された種のうち、表 3.2.10 に示す法令や文献・資料等により指摘されている植物群落を重要な植物群落とした。その結果、表 3.2.11 に示す 3 群落を確認された。このうち、環境影響予測評価書における注目すべき植物群落として、イノデータブノキ群集、タチヤナギ群落及びマテバシイ群落の 3 群落を確認された。重要な植物群落の確認地点は図 3.2.4 に、生態情報及び確認状況は表 3.2.12 に示すとおりである。

表 3.2.10 重要な植物群落の選定基準

選定基準	
①	「第 2 回自然環境保全基礎調査特定植物群落調査報告書」（環境庁、昭和 53 年）、「第 3 回自然環境保全基礎調査特定植物群落調査報告書」（環境庁、昭和 63 年）、「第 5 回自然環境保全基礎調査特定植物群落調査報告書」（環境庁、平成 12 年）に掲載されている特定植物群落
②	植物群落レッドデータ・ブック」（NACS-J, WWF Japan、平成 8 年）に掲載されている植物群落
③	「佐島の丘開発事業環境影響予測評価書」（京浜急行電鉄株式会社、平成 12 年 12 月）において注目すべき植物群落とされた植物群落 イノデータブノキ群集、ヤブコウジースダジイ群集、タチヤナギ群落、アカガシ群落、マテバシイ群落

表 3.2.11 重要な植物群落

No.	植物群落	選定基準		
		①	②	③
1	イノデータブノキ群集			●
2	タチヤナギ群落			●
3	マテバシイ群落			●
合計 3 群落		0 群落	0 群落	3 群落

注) 重要種選定基準及び評価区分は以下のとおりである。

- ① A：原生林もしくはそれに近い自然林
B：国内若干地域に分布するが、極めて稀な植物群落又は個体群
C：比較的普通に見られるものであっても、南限、北限、隔離分布等分布限界になる産地に見られる植物群落または個体群
D：砂丘、断崖地、塩沼地、湖沼、河川、湿地、高山、石灰岩地等の特殊な立地に特有な植物群落または個体群で、その群落の特徴が典型的なもの
E：郷土景観を代表する植物群落で、特にその群落の特徴が典型的なもの
F：過去において人工的に植栽されたことが明らかな森林であっても、長期にわたって伐採等の手が入っていないもの
G：乱獲その他人為の影響によって、当該都道府県内で極端に少なくなるおそれのある植物群落または個体群
H：その他学術上重要な植物群落又は個体群
- ② 4：緊急に対策必要、3：対策必要、2：破壊の危機、1：要注意
- ③ 注目すべき植物群落

表 3.2.12 確認された重要な群落の生態情報及び確認状況（1/3）

イノデータブノキ群集		
指定状況	予測評価書：注目すべき植物群落	 令和6年7月4日撮影
植物群落の概要	常緑広葉樹高木林。群落高は15-20mに達する。沿海部の丘陵斜面や沖積地に発達する。表徴種・区分種はイノデ類、ケヤキ、エノキ。	
分 布	本州（東北地方南部以西）・四国・九州・琉球に分布する。	
確認状況	親水公園の西側の丘陵斜面に断片的な2つの林分がみられる。	

表 3.2.12 確認された重要な群落の生態情報及び確認状況（2/3）

タチヤナギ群落		
指定状況	予測評価書：注目すべき植物群落	 令和6年7月3日撮影
植物群落の概要	落葉低木。群落高は4mほど。河川敷、水田、沼の岸に多い。	
分　　布	北海道・本州・四国・九州に分布する。	
確認状況	親水公園内の池周辺に点在している。	

表 3.2.12 確認された重要な群落の生態情報及び確認状況（3/3）

マテバシイ 群落		
指定状況	予測評価書：注目すべき植物群落	 令和 6 年 7 月 4 日撮影
植物群落の概要	高木層にマテバシイが優占する常緑広葉樹林。群落高は 11-15m。東京湾周辺の林分は植栽起源とされる。	
分 布	本州(関東地方以西)・四国・九州・琉球に分布する。	
確認状況	県道 213 号に面した丘陵斜面に断片的な林分がみられる。	

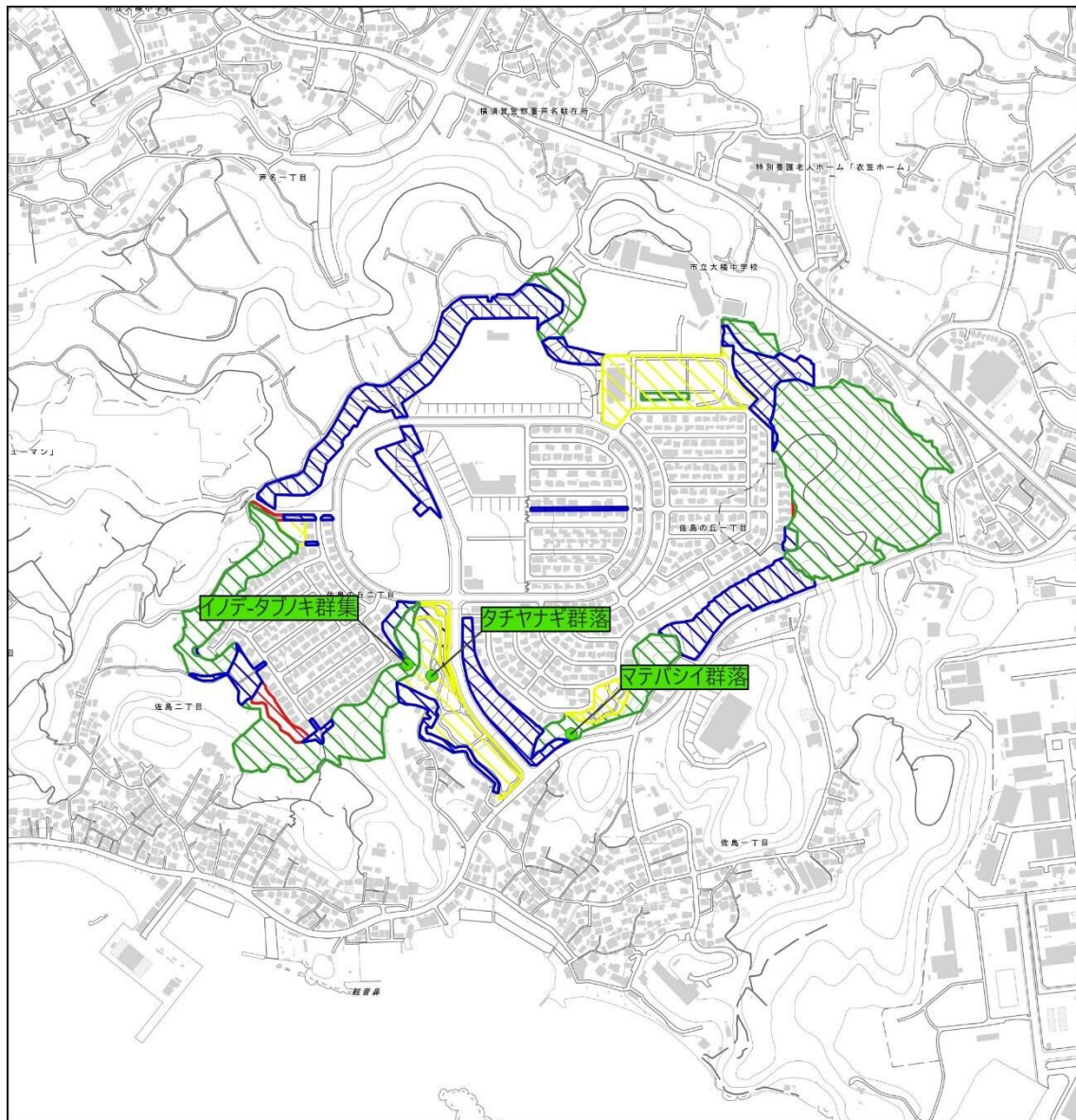


図 3.2.4 重要な植物群落確認地点

2) 動物

(1) 哺乳類

イ. 哺乳類相調査

調査範囲において生息が確認された哺乳類は、表 3.2.13 に示すとおり合計 5 目 8 科 8 種であった。確認された地点は図 3.2.5 に示すとおりである。

確認種は調査地域の環境を反映して、アズマモグラ、ノウサギ、タヌキ等の平地から丘陵地に広く生息する種が多く確認された。フィールドサイン等の確認例があまり多くはなかったことから、調査範囲を利用している哺乳類の数は全体に少ないものと考えられる。ただし、アズマモグラ、ノウサギ及びタヌキの確認例は比較的多く、調査範囲の保存緑地や回復森林の樹林を中心に広く生息しているようである。調査範囲北部の回復森林では、ススキ等の草地でノウサギの痕跡が多く確認されており、ノウサギの利用が比較的多いものと考えられる。

アライグマ及びハクビシンは、公園や保存緑地の池周辺で確認されたが、確認例数は少なかった。これらの中型哺乳類にとって、餌となるカエルやネズミ等の小動物や、実をつける植物が少ないことから、調査範囲を利用している個体は少ないものと考えられる。

クリハラリスは、高木の多い調査範囲の南部及び東部の樹林で確認された。道路を横断する個体も目撃されており、周辺樹林と往来しながら生息しているものと考えられる。

コウモリ類は、樹洞や洞窟などのねぐらになる環境は確認されなかったことから、摂餌のために周辺を利用していると考えられる。

表 3.2.13 哺乳類確認種

No	目名	科名	種名	調査時期			
				春季	夏季	秋季	冬季
1	モグラ	モグラ	アズマモグラ		○	○	○
2	コウモリ	ヒナコウモリ	アブラコウモリ属	△			
-			ヒナコウモリ科		△		
3	ウサギ	ウサギ	ノウサギ	○	○		○
4	ネズミ	リス	クリハラリス	○			○
5		ネズミ	アカネズミ	□		□	
6	ネコ	アライグマ	アライグマ			○	○
7		イヌ	タヌキ	○		○	○
8		ジャコウネコ	ハクビシン			○	○
合 計 5 目 8 科 8 種				5 種	3 種	5 種	6 種

注) 目視・フィールドサイン調査：○、トラップ調査：□、夜行性哺乳類目視調査：△

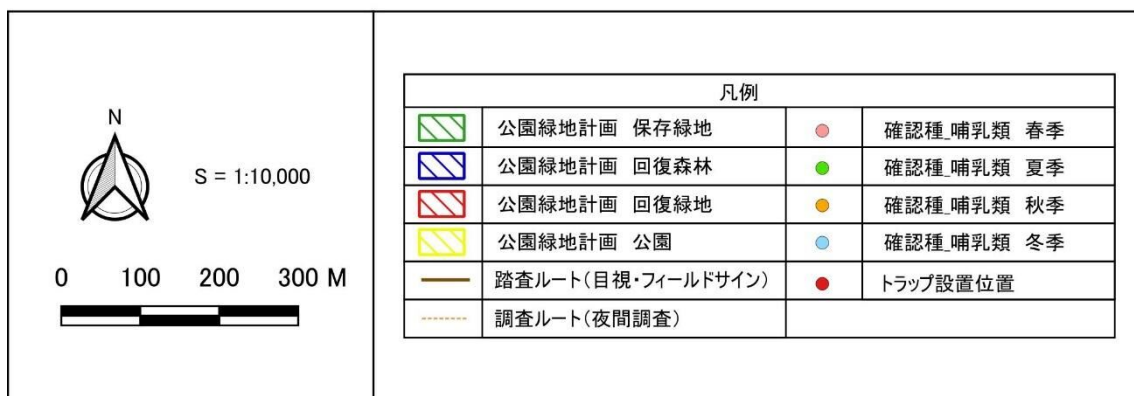
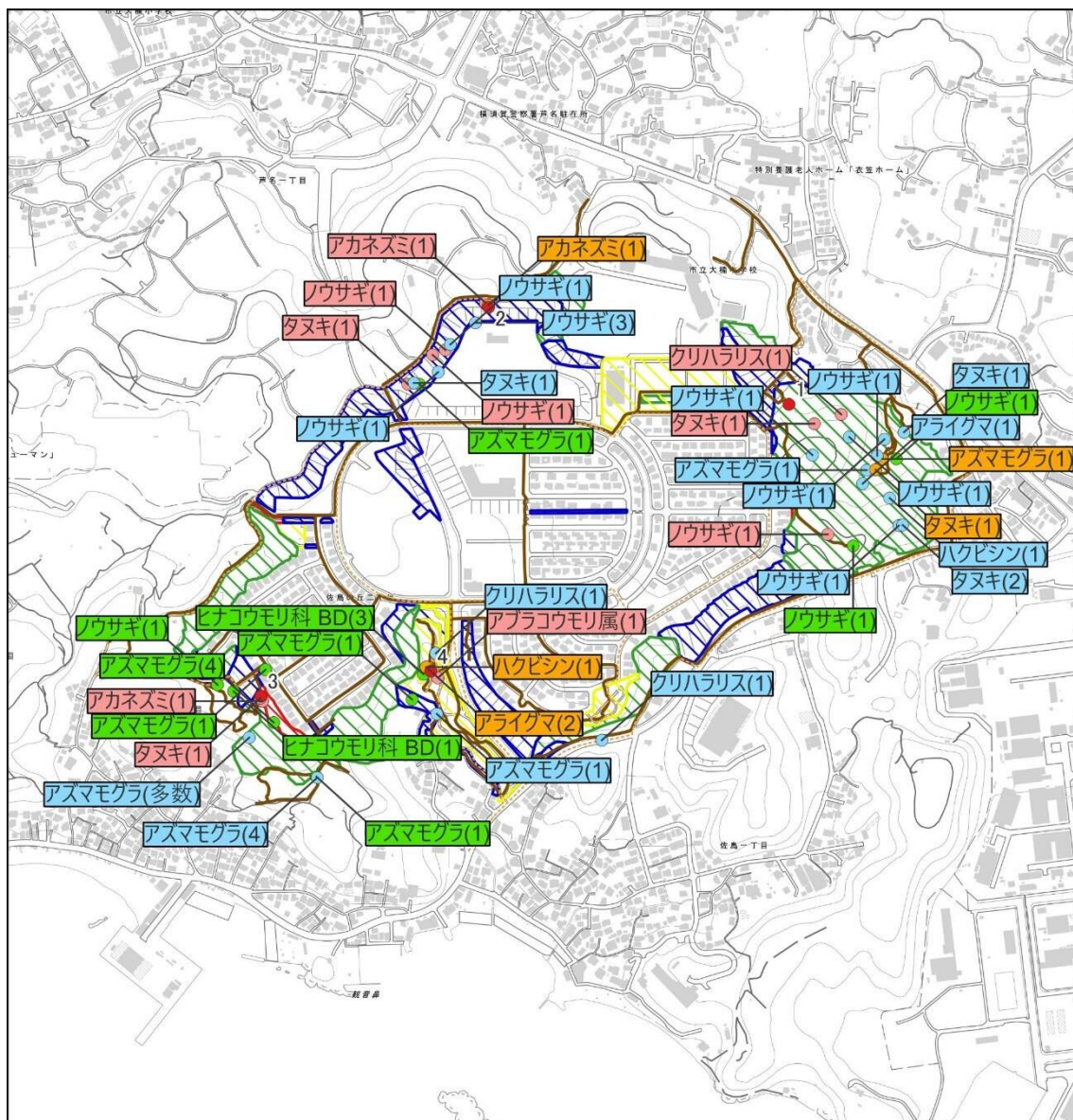


図 3.2.5 哺乳類確認地点

ロ. 重要種

現地調査で確認された種のうち、表 3.2.14 に示す法令や文献・資料等により指摘されている種を重要種とした。その結果、表 3.2.15 に示す 1 種が確認された。タヌキは環境影響予測評価書における注目すべき種として選定されている。重要種の確認地点は図 3.2.6 に、生態情報及び確認状況は表 3.2.16 に示すとおりである。

表 3.2.14 重要種の選定基準

選定基準	
①	「文化財保護法」(昭和 25 年、法律 214 号)における天然記念物及び特別天然記念物
②	「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(平成 3 年、法律 75 号)における国内希少野生動植物及び国際希少野生動植物
③	「環境省レッドリスト 2020 の公表について」(環境省、令和 2 年 3 月)の掲載種
④	「神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006」(神奈川県立生命の星・地球博物館、平成 18 年 7 月)の掲載種
⑤	「佐島の丘開発事業環境影響予測評価書」(京浜急行電鉄株式会社、平成 12 年 12 月)において注目すべき種とされた種 タヌキ、ホンDOIタチ

表 3.2.15 重要種(哺乳類)

No.	目名	科名	種名	選定基準				
				①	②	③	④	⑤
1	ネコ	イヌ	タヌキ					●
合計 1 目 1 科 1 種				0 種	0 種	0 種	0 種	1 種

注) 重要種選定基準及び評価区分は以下のとおりである。

- ① 特天：国指定特別天然記念物 国天：国指定天然記念物
- ② 国内：国内希少野生動植物種 特定：特定国内希少野生動植物種 緊急：緊急指定種
- ③ EX：絶滅 EW：野生絶滅 CR：絶滅危惧 IA 類 EN：絶滅危惧 IB 類 VU：絶滅危惧 II 類 NT：準絶滅危惧 DD：情報不足 LP：絶滅のおそれのある地域個体群
- ④ EX：絶滅 EW：野生絶滅 CR+EN：絶滅危惧 I 類 CR：絶滅危惧 IA 類 EN：絶滅危惧 IB 類 VU：絶滅危惧 II 類 NT：準絶滅危惧 DD：情報不足、要：要注意、減：減少種、希：希少種、注：注目種、不：不明種、LP：絶滅のおそれのある地域個体群
- ⑤ 注目すべき種

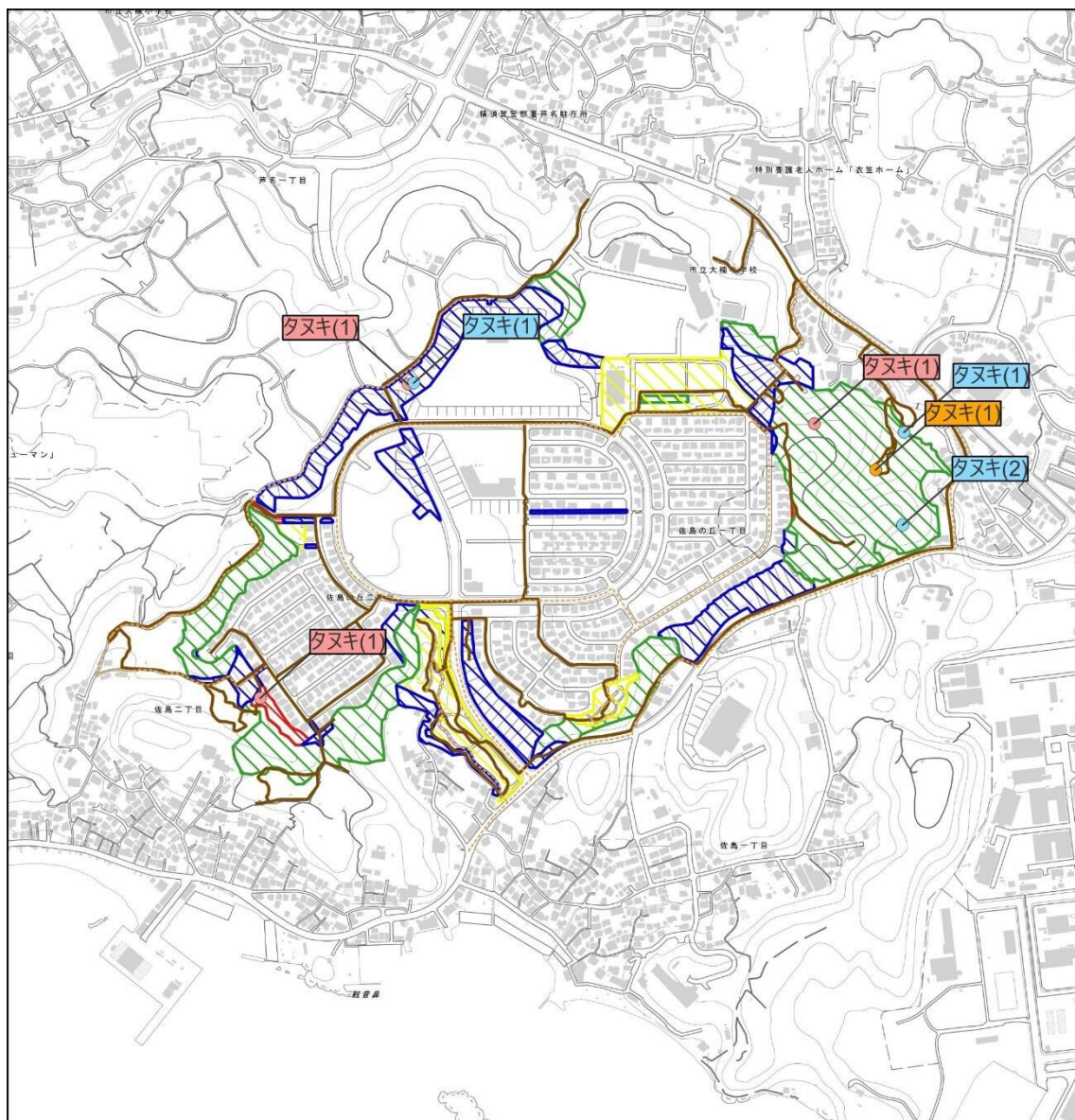


図 3.2.6 哺乳類重要種確認地点

表 3.2.16 確認された重要種の生態情報及び確認状況

タヌキ（イヌ科）		
指定状況	予測評価書：注目すべき種	 タメ糞 令和6年4月16日撮影
種の概要	郊外の住宅地周辺から山地まで広く生息する。鳥類、ノネズミ類等の小型動物、昆虫、野生果実類などを採食するが、甲虫類の幼虫、ミミズ等の土壌動物の採食量が比較的多い。排泄物を特定の場所に集中するタメ糞を行う。	
分 布	北海道、本州、四国、九州、周辺島しょ	
確認状況	春季に回復緑地の樹林内で目視により1個体確認されたほか、回復森林及び保存緑地の樹林内でタメ糞（写真の赤丸内）が2例確認された。 秋季に保存緑地の湿地で足跡が1例確認された。 冬季に回復森林及び保存緑地の樹林内で、タメ糞が4例確認された。	

(2) 鳥類

イ. 鳥類相調査（直接観察法）

調査範囲において生息が確認された鳥類は、表 3.2.17 に示すとおり合計 12 目 29 科 49 種であった。

確認種は調査地域の環境を反映して、コゲラやアオゲラ、キビタキ等の樹林性種、モズやシジュウカラ、ヒヨドリ等の樹林から樹林周辺に生息する種が主体であった。また造成地や人家が存在することから、ヒバリやコチドリ、セッカ等の草地から裸地に生息する種、ツバメやムクドリ、スズメ等の人家周辺に生息する種も確認された。猛禽類ではトビのほかに、春季にサシバ及びノスリ、秋季にミサゴ、ハチクマ及びサシバ、冬季にミサゴ、ハイタカ、ノスリ、チョウゲンボウ及びハヤブサが確認された。

渡り区分では、留鳥 34 種 (69.4%)、夏鳥 6 種 (12.2%)、冬鳥 9 種 (18.4%) となっており、調査地域やその周辺に年間を通して生息する留鳥が約 7 割を占めていた。また、約 1 割が調査地域やその周辺へ繁殖のために渡来する夏鳥、約 2 割が調査地域を越冬地として利用する冬鳥であった。ただし、猛禽類のサシバとハチクマは夏鳥ではあるものの、調査範囲と周辺では繁殖が確認されておらず、秋季の渡りによる通過個体であると考えられる。

表 3.2.17 鳥類確認種

No	目名	科名	種名	渡り区分	調査時期			
					春季	夏季	秋季	冬季
1	キジ	キジ	コジュケイ	留鳥	○	○	○	○
2			キジ	留鳥	○	○	○	○
3	カモ	カモ	カルガモ	留鳥	○	○		
4	ハト	ハト	カワラバト (ドバト)	留鳥	○	○	○	○
5			キジバト	留鳥	○	○	○	○
6	カツオドリ	ウ	カワウ	留鳥		○		○
7	ペリカン	サギ	アオサギ	留鳥	○	○	○	○
8			ダイサギ	留鳥	○	○	○	○
9			コサギ	留鳥	○			○
10	アマツバメ	アマツバメ	ヒメアマツバメ	留鳥		○	○	
11	チドリ	チドリ	コチドリ	夏鳥	○	○		
12	タカ	ミサゴ	ミサゴ	留鳥			○	○
13		タカ	ハチクマ	夏鳥			○	
14			トビ	留鳥	○	○	○	○
15			ハイタカ	冬鳥				○
16			サシバ	夏鳥	○		○	
17			ノスリ	冬鳥	○			○
18	ブッポウソウ	カワセミ	カワセミ	留鳥	○	○		○
19	キツツキ	キツツキ	コゲラ	留鳥	○	○	○	○
20			アオゲラ	留鳥	○		○	
21	ハヤブサ	ハヤブサ	チョウゲンボウ	留鳥				○
22			ハヤブサ	冬鳥				○
23	スズメ	モズ	モズ	留鳥	○		○	○
24		カラス	ハシボソガラス	留鳥	○	○	○	○
25			ハシブトガラス	留鳥	○	○	○	○
26		シジュウカラ	ヤマガラ	留鳥	○	○	○	○
27			シジュウカラ	留鳥	○	○	○	○
28		ヒバリ	ヒバリ	留鳥	○			
29		ツバメ	ツバメ	夏鳥	○	○	○	
30			コシアカツバメ	夏鳥		○		
31		ヒヨドリ	ヒヨドリ	留鳥	○	○	○	○
32		ウグイス	ウグイス	留鳥	○	○	○	○
33		エナガ	エナガ	留鳥	○	○	○	○
34		チメドリ	ガビチョウ	留鳥	○	○	○	○
35		メジロ	メジロ	留鳥	○	○	○	○
36		セッカ	セッカ	留鳥	○	○		
37		ムクドリ	ムクドリ	留鳥	○	○	○	○
38		ヒタキ	シロハラ	冬鳥				○
39			アカハラ	冬鳥				○
40			ツグミ	冬鳥	○			○
41			ジョウビタキ	冬鳥				○
42			イソヒヨドリ	留鳥	○	○	○	○
43			キビタキ	夏鳥	○			
44		スズメ	スズメ	留鳥	○	○	○	○
45		セキレイ	ハクセキレイ	留鳥	○	○	○	○
46		アトリ	カワラヒワ	留鳥	○	○	○	○
47			シメ	冬鳥	○			
48		ホオジロ	ホオジロ	留鳥	○	○	○	○
49			アオジ	冬鳥				○
合 計 12目 29科 49種					37種	31種	30種	37種

注) 渡り区分

留鳥：一定の地域に年間を通じて生息する種、夏鳥：繁殖のため夏季に南方から飛来する種、冬鳥：越冬のため冬季に飛来する種、旅鳥：夏の繁殖期と冬の越冬期の間を渡る過程において、中継地として飛来する種

ロ. ラインセンサス調査

調査範囲において各季に実施した 4 本のラインセンサス調査では、合計 29 種、延べ 347 個体の鳥類が確認された。種及びルート別の確認個体数は図 3.2.7 に示すとおりである。

年間を通じて確認個体数が最も多かったのはスズメで 65 個体 (18.7%)、次いでムクドリ 38 個体 (11.0%)、ヒヨドリの 30 個体 (8.6%) 等となり、これら 3 種で全体の約 4 割を占めていた。

センサスルート別にみると、L1 では年間を通して 19 種 112 個体が確認され、スズメ、ムクドリ、ヒヨドリ、メジロがいずれも 10 個体以上で多くを占めていた。また、親水公園があることから水辺に生息するアオサギが 3 季で、またダイサギが 1 季で確認された。

L2 では年間を通して 17 種 41 個体が確認され、スズメ、ハシブトガラス、ヒヨドリがそれぞれ 5 個体以上で上位を占めていたが、ルートが短いことや住宅地内にある芝生公園であることから、他のルートと比較して確認個体数は少なかった。

L3 では年間を通して 16 種 61 個体が確認され、スズメ、メジロ、ハシブトガラスがそれぞれ 5 個体以上で上位を占めていた。ルートの大半は鬱閉した常緑広葉樹林と農地であり、確認個体数は多くなかった。

L4 では年間を通して 22 種 133 個体が確認され、ムクドリ、スズメ、ウグイス、ヒヨドリが 10 個体以上で上位を占めていた。ルートは、公園や落葉広葉樹林、常緑広葉樹林、草地等を含んでおり、4 ルートのうち確認種及び確認個体数ともに最も多かった。

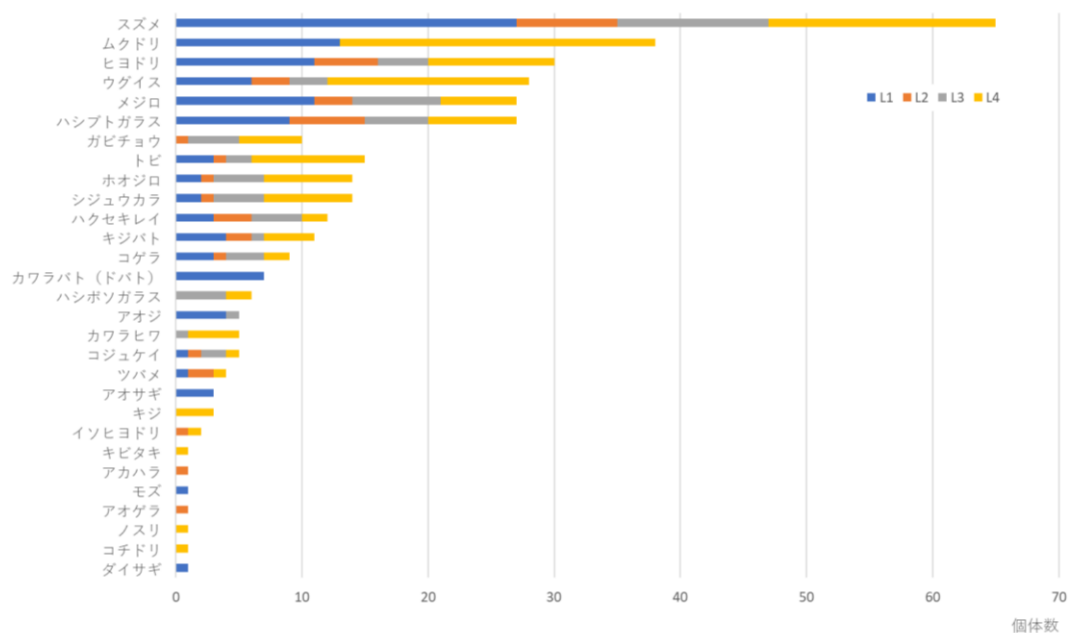


図 3.2.7 ラインセンサス調査における種及びルート別の確認個体数

次に、季節別の確認種数と個体数は図 3.2.8 に示すとおりである。季節別では、春季 20 種 89 個体、夏季 21 種 102 個体、秋季 17 種 98 個体、冬季 19 種 68 個体が確認された。

調査範囲の鳥類相は、約 7 割が年間を通して同地域に生息する留鳥であることから、確認種数の季節変動が少なく 20 種前後となっている。このことは、調査範囲の環境が主に留鳥の生息地となっており、それに加えて夏鳥の繁殖地及び冬鳥の越冬地としても利用されていることを示唆している。

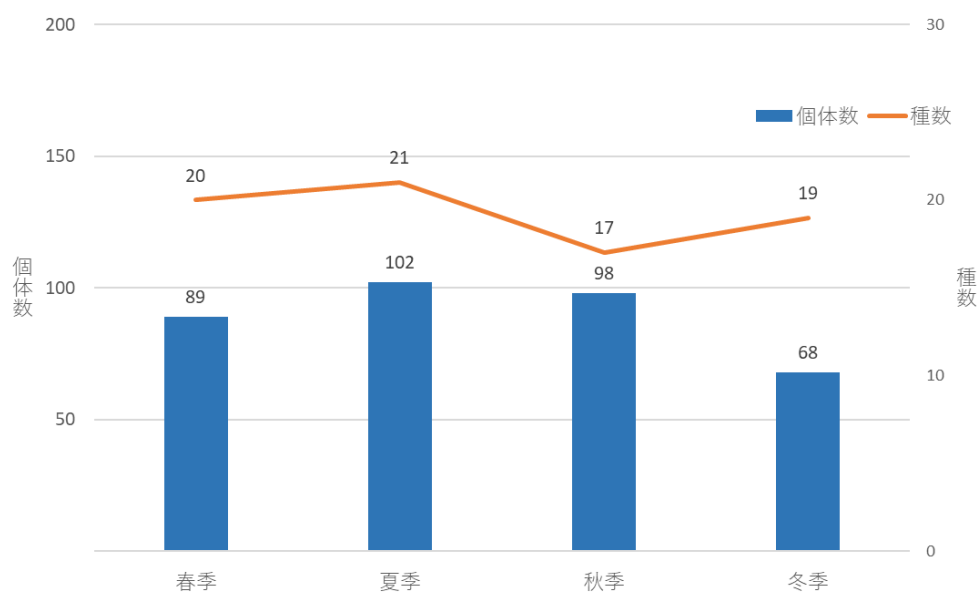


図 3.2.8 ラインセンサス調査における季節別の種数及び個体数

ハ. 繁殖調査

表 3.2.18 に示す繁殖可能性の区分（「第 2 回自然環境保全基礎調査」（1983 年環境庁））に基づき、繁殖期（調査時期：令和 6 年 4 年 25 日及び同年 6 月 27 日）に調査範囲内で確認された鳥類の繁殖状況を以下に整理した。

表 3.2.18 繁殖可能性の区分

ランク	繁殖に関する基準
a	繁殖を確認した。
b	繁殖の確認はできなかったが、繁殖の可能性はある。
c	生息を確認したが、繁殖については何ともいえない。
d	姿・声を確認したが、繁殖の可能性はおそらくない。
e	生息は確認できなかったが、環境から推測して繁殖期における生息が考えられる。
f	繁殖期における生息を確認できず、繁殖については何ともいえない。

出典：「第 2 回自然環境保全基礎調査」1983 年環境庁編

繁殖調査結果は表 3.2.19 に示すとおりであり、調査範囲内での繁殖は確認されなかったが、繁殖の可能性のあるものとしては、ヒヨドリ、ムクドリ、スズメ、ハシボソガラス、ガビチョウ、コジュケイ、ヤマガラ、シジュウカラ、ウグイス、メジロ、ホオジロがあげられ、そのほかは c または d ランクと考えられる。ただし、調査範囲外ではあるが公園に隣接する居住ゾーン内の人家軒下でツバメの繁殖が確認されたため、表中には記載した。

表 3.2.19 繁殖調査結果

ランク	種名	観察内容
a	ツバメ	調査範囲外ではあるが、親鳥が巢中の雛に給餌した ※調査範囲に隣接する居住ゾーン内での確認
b	ヒヨドリ ムクドリ スズメ ハシボソガラス ガビチョウ コジュケイ ヤマガラ シジュウカラ ウグイス メジロ ホオジロ	幼鳥を見た 親鳥が巣材を運ぶのを見た、幼鳥を見た 親鳥が餌を運ぶのを見た、幼鳥を見た 親鳥が巣材を運ぶのを見た 親鳥が巣材を運ぶのを見た さえずり声を聞いた さえずり声を聞いた さえずり声を聞いた さえずり声を聞いた さえずり声を聞いた さえずり声を聞いた
c	キジ、カワラバト（ドバト）、キジバト、トビ、コゲラ、アオゲラ、モズ、ハシブトガラス、エナガ、セッカ、ハクセキレイ、カワラヒワ	
d	カルガモ、カワウ、アオサギ、ダイサギ、コサギ、ヒメアマツバメ、コチドリ、サシバ、ノスリ、カワセミ、ヒバリ、コシアカツバメ、ツグミ、イソヒヨドリ、キビタキ、シメ	
e	該当種なし	
f	該当種なし	

以下にランクごとに判定根拠をまとめた。

a ランクのツバメは、調査範囲に隣接する居住ゾーン内の人家軒下に作られた巢に、親鳥が餌を運ぶ様子を確認したことによる。ただし、私有地のため敷地内に立ち入ることはできず、巢内雛の目視による確認はしていない。

b ランクについては、ヒヨドリの幼鳥を確認したこと、ムクドリ及びスズメの親鳥が巢材や餌を運ぶのを確認したこと、ハシボソガラス及びガビチョウの親鳥が巢材を運ぶのを確認したことによる。また、コジュケイ、ヤマガラ、シジュウカラ、ウグイス、メジロ及びホオジロは、それぞれ特有のさえずり声を確認したことによる。なお、調査範囲内に人家はないが、人家付近での営巣が知られているスズメやムクドリについては、隣接する居住ゾーンの人家のほかに樹上での営巣も知られていることからbランクとした。これらbランクの種は、いずれも留鳥とされ、調査範囲内に通年生息するものと考えられる。

c ランクについては、調査範囲内の保存緑地、回復森林、回復緑地及び公園には樹林や湿地、草地等があり、このいずれかの環境で営巣する可能性がある種で、留鳥の中から抽出した。

d ランクについては、調査範囲内での出現率が低いこと、営巣に適した環境がないこと、「三浦半島の野鳥」（横須賀市自然博物館 1991 年）等の文献から調査範囲内での繁殖の可能性はおそくないと考えられること、等を考慮して判定した。ただしコチドリ及びヒバリは、調査範囲内の保存緑地、回復森林、回復緑地及び公園では繁殖していないが、調査範囲に隣接する造成地に形成された裸地や草地での繁殖可能性はある。また同様に、イソヒヨドリは居住ゾーンの人家や人工構造物の隙間等で繁殖している可能性はある。

二. 定点調査

定点調査では、冬季に 25 種が確認された。猛禽類では、ミサゴ、トビ、ハイタカ及びノスリが観察された。

移動中のミサゴやハイタカ、ノスリが確認され、調査範囲とその周辺はこれら猛禽類の行動範囲の一部に入っているものと考えられた。

ホ. 重要種

現地調査で確認された種のうち、表 3.2.20 に示す法令や文献・資料等により指摘されている種を重要種とした。その結果、表 3.2.21 に示す 19 種が確認された。このうち、環境影響予測評価書における注目すべき種として、アオサギ、サシバ、ノスリ、ハヤブサ、チョウゲンボウ、カワセミ、アオゲラ、キビタキの 8 種が確認された。なお、アカハラとアオジは非繁殖期である冬季に確認されたものであり、「神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006」で指摘されている繁殖期における減少種及び絶滅危惧Ⅱ類には該当しないが、参考情報として記載した。

重要種の確認地点は図 3.2.9 に、生態情報及び確認状況は表 3.2.22 に示すとおりである。

表 3.2.20 重要種の選定基準

選定基準	
①	「文化財保護法」(昭和 25 年、法律 214 号)における天然記念物及び特別天然記念物
②	「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(平成 3 年、法律 75 号)における国内希少野生動植物及び国際希少野生動植物
③	「環境省レッドリスト 2020 の公表について」(環境省、令和 2 年 3 月)の掲載種
④	「神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006」(神奈川県立生命の星・地球博物館、平成 18 年 7 月)の掲載種
⑤	「佐島の丘開発事業環境影響予測評価書」(京浜急行電鉄株式会社、平成 12 年 12 月)において注目すべき種とされた種
	ウミウ、アオサギ、オオタカ、サシバ、ノスリ、ハヤブサ、チョウゲンボウ、ツツドリ、カワセミ、アオゲラ、キビタキ

表 3.2.21 重要種（鳥類）

No.	目名	科名	種名	選定基準 ^{注1)}					
				①	②	③	④		⑤
							a	b	
1	ペリカン	サギ	アオサギ						●
2	アマツバメ	アマツバメ	ヒメアマツバメ				減		
3	チドリ	チドリ	コチドリ				注		
4	タカ	ミサゴ	ミサゴ			NT	VU	NT	
5		タカ	ハチクマ			NT	CR+EN		
6			ハイタカ			NT	DD	希	
7			サシバ			VU	CR+EN		●
8			ノスリ				VU	希	●
9			ブッポウソウ	カワセミ	カワセミ				
10	キツツキ	キツツキ	アオゲラ						●
11	ハヤブサ	ハヤブサ	チョウゲンボウ						●
12			ハヤブサ		国内	VU	CR+EN	希	●
13	スズメ	モズ	モズ				減		
14		ヒバリ	ヒバリ				減		
15		ツバメ	ツバメ				減		
16			コシアカツバメ				減		
17		セッカ	セッカ				減	減	
—		ヒタキ	アカハラ				減 ^{注2)}		
18			キビタキ				減		●
19		アトリ	カワラヒワ				減		
—		ホオジロ	アオジ				VU ^{注2)}		
合計 8 目 15 科 19 種				0 種	1 種	5 種	15 種	5 種	8 種

注 1) 重要種選定基準の評価区分は以下のとおりである。

- ① 特天：国指定特別天然記念物 国天：国指定天然記念物
 ② 国内：国内希少野生動植物種 特定：特定国内希少野生動植物種 緊急：緊急指定種
 ③ EX：絶滅 EW：野生絶滅 CR：絶滅危惧 IA 類 EN：絶滅危惧 IB 類 VU：絶滅危惧 II 類 NT：準絶滅危惧 DD：情報不足 LP：絶滅のおそれのある地域個体群
 ④ a：繁殖期、b：非繁殖期
 EX：絶滅 EW：野生絶滅 CR+EN：絶滅危惧 I 類 CR：絶滅危惧 IA 類 EN：絶滅危惧 IB 類 VU：絶滅危惧 II 類 NT：準絶滅危惧 DD：情報不足、要：要注意、減：減少種、希：希少種、注：注目種、不：不明種、LP：絶滅のおそれのある地域個体群
 ⑤ 注目すべき種

注 2) 確認時期が非繁殖期の冬季であるため、繁殖期の基準は適用されないが、参考情報として記載した。したがって、確認種数には計数されていない。

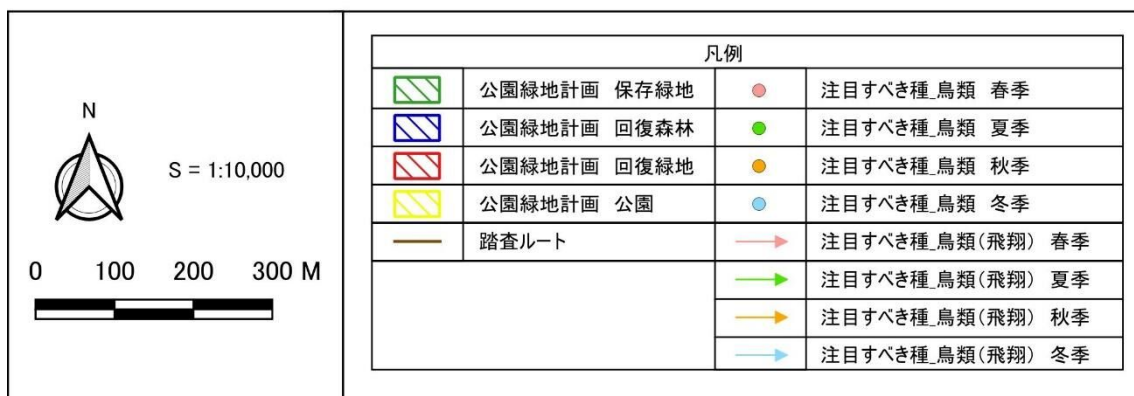


図 3.2.9 鳥類重要種確認地点

表 3.2.22 確認された重要種の生態情報及び確認状況（1/21）

アオサギ（サギ科）		
指定状況	予測評価書：注目すべき種	 令和6年4月25日撮影
種の概要	北海道、本州、四国、対馬で繁殖し、北の個体は冬季に暖地へ移動する。川、池沼、水田、干潟等に生息し、魚やカエル等を捕食する。丘陵地の茂った林等で、樹上に小枝や枯れ枝でできた巣を作って集団繁殖する。	
分　　布	北海道～南西諸島	
確認状況	春季に飛翔中の2個体が確認された。 夏季に飛翔中の2個体が確認された。 秋季に飛翔中や親水公園の水辺にとまる個体が計2個体確認された。 冬季に親水公園の水辺にとまる2個体が確認された。	

表 3.2.22 確認された重要種の生態情報及び確認状況（2/21）

ヒメアマツバメ（アマツバメ科）		
指定状況	県 RDB(繁殖期)：減少種	 令和6年6月27日撮影
種の概要	関東以南の太平洋岸に留鳥として生息し、主に平野部の市街地から低山の開けた場所の空中で昆虫類を捕食する。鉄筋コンクリートの建造物や橋げたに営巣し、イワツバメ等ほか種の巣を利用することが多い。	
分 布	関東以南の太平洋岸。渡り期には東北地方でも見られる。	
確認状況	夏季に飛翔中の1個体が確認された。 秋季に飛翔中の1個体が確認された。	

表 3.2.22 確認された重要種の生態情報及び確認状況（3/21）

コチドリ（チドリ科）		
指定状況	県 RDB(繁殖期):注目種	 令和 6 年 4 月 25 日撮影
種の概要	主に夏鳥として渡来し全国で繁殖。西南日本では越冬するものもある。川の中下流の砂礫河原が主な生息場所で、昆虫等の小動物を餌とする。繁殖期にはつがいで縄張りを持ち、巣は開けた砂地や砂礫地の地面に作る。	
分 布	北海道～南西諸島	
確認状況	春季に公園や調査範囲外の造成裸地等の 5 箇所で、計 7 個体が確認された。 夏季に公園や調査範囲外の造成裸地等の 3 箇所で、計 3 個体が確認された。	

表 3.2.22 確認された重要種の生態情報及び確認状況（4/21）

ミサゴ（タカ科）		
指定状況	環境省 RL：準絶滅危惧 県 RDB(繁殖期)：絶滅危惧Ⅱ類 県 RDB(非繁殖期)：準絶滅危惧	 令和 6 年 9 月 24 日撮影
種の概要	留鳥として海岸付近や内陸の河川、湖沼に生息し、水面上を飛翔して魚を捕獲する。捕らえた魚は、岩上や杭の上、木の枝等へ運んで食べる。海岸の岩の上や岩棚、水辺に近い大木上に枯枝を積み重ねて営巣する。	
分 布	北海道～南西諸島	
確認状況	秋季に飛翔中の 1 個体が確認された。 冬季に飛翔中の 1 個体が確認された。	

表 3.2.22 確認された重要種の生態情報及び確認状況（5/21）

ハチクマ（タカ科）		
指定状況	環境省 RL：準絶滅危惧 県 RDB(繁殖期)：絶滅危惧Ⅰ類	 令和6年9月24日撮影
種の概要	夏鳥として低山や丘陵地の林に渡来し、林内で昆虫類や両生・爬虫類を捕食する。特にハチ類の幼虫や蛹を好むとされる。林内の大木に枯枝を積み重ねて営巣する。春秋の渡り期には集団で渡る様子が観察される。	
分 布	夏鳥として北海道～九州に渡来。	
確認状況	秋季に飛翔中の1個体が確認された。	

表 3.2.22 確認された重要種の生態情報及び確認状況（6/21）

ハイタカ（タカ科）		
指定状況	環境省 RL：準絶滅危惧 県 RDB(繁殖期)：情報不足 県 RDB(非繁殖期)：希少種	 令和7年1月15日撮影
種の概要	亜高山から平地の林に生息し、林内や林縁の農地、草地等で主に小鳥類を捕食する。冬は平地から山地の林、農耕地、河川敷に生息。北海道と本州の一部で繁殖し、主に針葉樹の樹上に枯枝を積み重ねて営巣する。	
分 布	留鳥として四国以北に分布するほか、全国に冬鳥として渡来。	
確認状況	冬季に飛翔中の1個体が確認された。	

表 3.2.22 確認された重要種の生態情報及び確認状況（7/21）

サシバ（タカ科）		
指定状況	環境省 RL：絶滅危惧Ⅱ類 県 RDB（繁殖期）：絶滅危惧Ⅰ類 予測評価書：注目すべき種	 令和6年4月25日撮影
種の概要	低山から丘陵の林に生息し、林縁に近い水田等の開けた場所でヘビ、トカゲ、カエル、昆虫類等を捕食する。林内のマツやスギの枝上に枯枝を積み重ねて営巣する。春秋の渡り期には集団で渡る様子が観察される。	
分 布	夏鳥として本州、四国、九州に渡来。南西諸島では越冬する。	
確認状況	春季に飛翔中の成鳥1個体が確認された。 秋季に飛翔中の18個体が確認された。	

表 3.2.22 確認された重要種の生態情報及び確認状況（8/21）

ノスリ（タカ科）		
指定状況	県 RDB(繁殖期):絶滅危惧Ⅱ類 県 RDB(非繁殖期):希少種 予測評価書:注目すべき種	 令和6年4月25日撮影
種の概要	山地や農耕地、河原等に生息しネズミやカエル、ヘビ、昆虫類等を捕食する。北海道、本州、四国の低山から亜高山帯の森林で繁殖し、冬季は各地に冬鳥として渡来する。林内の大木の枝に枯枝を積み重ねて営巣する。	
分 布	北海道～九州	
確認状況	春季に電柱にとまる1個体が確認された。 冬季に飛翔中の1個体が確認された。	

表 3.2.22 確認された重要種の生態情報及び確認状況（9/21）

カワセミ（カワセミ科）		
指定状況	予測評価書：注目すべき種	写真未撮影
種の概要	北海道では夏鳥、本州以南では留鳥または漂鳥。平地から山地の川、池、湖等の水辺に生息し、水中に飛び込んで魚やエビ等を捕食する。川岸の土崖に横穴を掘って営巣するが、水辺から離れた崖を使うこともある。	
分 布	北海道～南西諸島	
確認状況	春季に保存緑地内の池で水際を飛翔する 1 個体が確認された。 夏季に保存緑地に隣接する松越川で飛翔中の 1 個体が確認された。 冬季に親水公園の池で 1 個体が確認された。	

表 3.2.22 確認された重要種の生態情報及び確認状況（10/21）

アオゲラ（キツツキ科）		
指定状況	予測評価書：注目すべき種	 令和 6 年 9 月 24 日撮影
種の概要	平地から山地の林で繁殖し、冬季は市街地近くの雑木林や公園の林等でも見られる。主に昆虫類を、木の幹の樹皮の間から取り出して捕食するが、秋冬には木の実も食べる。林内の生きた木に穴を掘って営巣する。	
分 布	本州～九州（日本固有種）	
確認状況	春季に保存緑地等の 3 箇所で、計 3 個体が確認された。 秋季に保存緑地等の 2 箇所で、計 2 個体が確認された。	

表 3.2.22 確認された重要種の生態情報及び確認状況（11/21）

チョウゲンボウ（ハヤブサ科）		
指定状況	予測評価書：注目すべき種	写真未撮影
種の概要	農耕地や河川敷、草地に生息し、主に小動物や昆虫類を捕食する。海岸や川岸の断崖の横穴、岩棚、樹洞等に直接産卵する。近年は人工構造物での営巣が増えている。主に東日本で繁殖し、冬鳥として各地に渡来。	
分 布	北海道～南西諸島	
確認状況	冬季に飛翔中の 1 個体が確認された。	

表 3.2.22 確認された重要種の生態情報及び確認状況（12/21）

ハヤブサ（ハヤブサ科）		
指定状況	種の保存法：国内希少野生動植物種 環境省 RL：絶滅危惧Ⅱ類 県 RDB(繁殖期)：絶滅危惧Ⅰ類 県 RDB(非繁殖期)：希少種 予測評価書：注目すべき種	写真未撮影
種の概要	海岸や海岸に近い山の断崖・急斜面、河原、原野、農耕地等に生息し、主に鳥類を捕食する。海岸や海岸に近い山の断崖岩棚に直接産卵する。北海道から九州で少数が繁殖し、冬鳥として南西諸島を含む全国に渡来。	
分 布	北海道～南西諸島	
確認状況	冬季に飛翔中の 1 個体が確認された。	

表 3.2.22 確認された重要種の生態情報及び確認状況（13/21）

モズ（モズ科）		
指定状況	県 RDB（繁殖期）：減少種	 令和 6 年 4 月 25 日撮影
種の概要	平地から山地の林縁や疎林、農耕地、河畔林、公園等に生息し、トカゲやカエル、昆虫類等の小動物を捕食する。捕獲した獲物を小枝に刺す「はやにえ」がよく知られる。低木の茂みで営巣する。南西諸島では冬鳥。	
分 布	北海道～南西諸島	
確認状況	春季に親水公園で樹上にとまる 1 個体が確認された。 秋季に回復森林で樹上にとまる 1 個体が確認された。 冬季に回復森林で樹上にとまる 1 個体が確認された。	

表 3.2.22 確認された重要種の生態情報及び確認状況（14/21）

ヒバリ（ヒバリ科）		
指定状況	県 RDB（繁殖期）：減少種	 令和 6 年 4 月 25 日撮影
種の概要	畑、牧場、草原、河原、埋立地等に生息し、低茎草本がまばらに生えて露出した地面の多い場所を好む。地上を歩きながら草の実や昆虫等を食べる。つがいで縄張りを持ち、草の根元等の地上に枯れ草を使って営巣。	
分 布	北海道～九州	
確認状況	春季に公園の路上を歩行する 1 個体が確認された。	

表 3.2.22 確認された重要種の生態情報及び確認状況（15/21）

ツバメ（ツバメ科）		
指定状況	県 RDB（繁殖期）：減少種	 令和 6 年 6 月 27 日撮影
種の概要	夏鳥として東南アジアから渡来する。市街地周辺、農耕地、河川敷等に生息し、飛翔しながら昆虫類等を捕食する。人工建造物に泥と枯草からなる巣を作って繁殖する。本州の一部で越冬、南西諸島では旅鳥。	
分 布	北海道～南西諸島	
確認状況	春季に公園や保存緑地、回復森林に加え、調査範囲外を含む 13 箇所で飛翔する計 21 個体が確認された。 夏季に公園や保存緑地、回復森林に加え、調査範囲外を含む 20 箇所で飛翔する計 36 個体が確認された。居住ゾーン内の人家軒下で 1 巣が確認された。 秋季に公園や回復森林に加え、調査範囲外を含む 4 箇所で飛翔する計 7 個体が確認された。	

表 3.2.22 確認された重要種の生態情報及び確認状況（16/21）

コシアカツバメ（ツバメ科）		
指定状況	県 RDB（繁殖期）：減少種	写真未撮影
種の概要	夏鳥として 4 月下旬頃に渡来し九州以北で繁殖する。四国、九州では越冬例がある。空中を飛ぶ昆虫類を捕食し、コンクリート製の建造物等に泥を使って徳利型の巣を作る。秋の渡り時には数十羽の群れで移動する。	
分 布	北海道～九州	
確認状況	夏季に飛翔中の 1 個体が確認された。	

表 3.2.22 確認された重要種の生態情報及び確認状況（17/21）

セッカ（セッカ科）		
指定状況	県 RDB（繁殖期）：減少種 県 RDB（非繁殖期）：減少種	写真未撮影
種の概要	留鳥または漂鳥として本州以南で繁殖し、東北・北陸地方では局地的。低地から山地の草原、農耕地、河原に生息し、昆虫等を捕食。チガヤ等のやや背の低いイネ科草地を好み、イネ科植物の葉とクモの糸で巣を作る。	
分　　布	本州～南西諸島	
確認状況	春季に調査範囲外の造成地の草地で、さえずりにより 1 個体が確認された。 夏季に調査範囲外の造成地の草地で、草本にとまる 1 個体が確認された。	

表 3.2.22 確認された重要種の生態情報及び確認状況（18/21）

アカハラ（ヒタキ科）		
指 定 状 況 注)	県 RDB(繁殖期):減少種	写真未撮影
種の概要	夏鳥または漂鳥として本州中部以北の亜高山帯で繁殖し、東北や北海道では平地でも繁殖。冬季は山麓や暖地に移動する。明るい林や疎林に生息し、昆虫や木の実を食べる。樹枝上に枯れ茎や樹枝で碗形の巣を作る。	
分 布	北海道～南西諸島	
確認状況	冬季に保存緑地で 1 個体が確認された。	

注) 本種の確認時期は非繁殖期の冬季であるため、繁殖期の基準は適用されないが、参考情報として記載した。

表 3.2.22 確認された重要種の生態情報及び確認状況（19/21）

キビタキ（ヒタキ科）		
指定状況	県 RDB（繁殖期）：減少種 予測評価書：注目すべき種	写真未撮影
種の概要	夏鳥として東南アジアから九州以北に渡来し、低山から山地の広葉樹林に生息する。渡りの時期には市街地でも見られることがある。昆虫類を捕食し、樹上に営巣する。南西諸島では留鳥として周年生息する。	
分 布	北海道～南西諸島	
確認状況	春季に保存緑地等の 3 箇所で、さえずりにより計 3 個体が確認された。	

表 3.2.22 確認された重要種の生態情報及び確認状況（20/21）

カワラヒワ（アトリ科）		
指定状況	県 RDB（繁殖期）：減少種	 令和 6 年 4 月 25 日撮影
種の概要	留鳥または漂鳥として九州以北に分布し、本州中部以北では冬に暖地へ移動する。北海道では夏鳥、南西諸島では冬鳥。平地から山地の雑木林、農耕地、都市公園、住宅地に生息。草の実を食べ、樹上に営巣する。	
分 布	北海道～南西諸島	
確認状況	春季に公園や保存緑地、回復森林、回復緑地に加え、調査範囲外を含む 10 箇所で計 16 個体が確認された。 夏季に公園や保存緑地、回復森林に加え、調査範囲外を含む 5 箇所で計 7 個体が確認された。 秋季に公園で計 2 個体が確認された。 冬季に公園や回復森林に加え、調査範囲外を含む 3 箇所で計 3 個体が確認された。	

表 3.2.22 確認された重要種の生態情報及び確認状況 (21/21)

アオジ（ホオジロ科）		
指 定 状 況 注)	県 RDB(繁殖期):絶滅危惧Ⅱ類	
種の概要	留鳥または漂鳥として本州中部以北の山地の林で繁殖し、冬季は積雪の少ない暖地へ移動する。草の実や昆虫等を食べ、地上や低木の枝上に草の茎や葉で巣を作る。冬季にはシベリア東部等からも越冬で多数が渡来。	
分 布	北海道～南西諸島	
確認状況	冬季に公園や保存緑地、回復森林に加え、調査範囲外を含む 6 箇所で計 9 個体が確認された。	

令和 7 年 1 月 15 日撮影

注) 本種の確認時期は非繁殖期の冬季であるため、繁殖期の基準は適用されないが、参考情報として記載した。

(3) 両生類・爬虫類

イ. 両生類相調査

調査範囲において生息が確認された両生類は、表 3.2.23 に示すとおり合計 1 目 3 科 3 種であった。確認された地点は図 3.2.10 に示すとおりである。

確認種は全てカエル類で、多くが池や湿地周辺で確認された。いずれも平地から丘陵地に普通に生息する種であった。なお、トウキョウサンショウウオの卵のうは確認されなかった。

ニホンアマガエルは、公園の池周辺や畑地周辺の樹林等の複数の地点で鳴き声により確認された。ヤマアカガエルは、調査範囲東部の保存緑地内の 2 箇所の池で幼生が確認された。幼生が確認されたことにより、それらの池で繁殖しているものと考えられる。本種はまた、保存緑地の樹林内でも幼体及び成体が確認された。シュレーゲルアオガエルは、調査範囲東部の保存緑地内の池及び調査範囲西部の湿地周辺で鳴き声が確認されており、これらの環境で繁殖している可能性がある。

表 3.2.23 両生類確認種

No	目名	科名	種名	調査時期		
				春季	夏季	秋季
1	無尾	アマガエル	ニホンアマガエル	○	○	
2		アカガエル	ヤマアカガエル	○	○	○
3		アオガエル	シュレーゲルアオガエル	○		
合 計 1 目 3 科 3 種				3 種	2 種	1 種

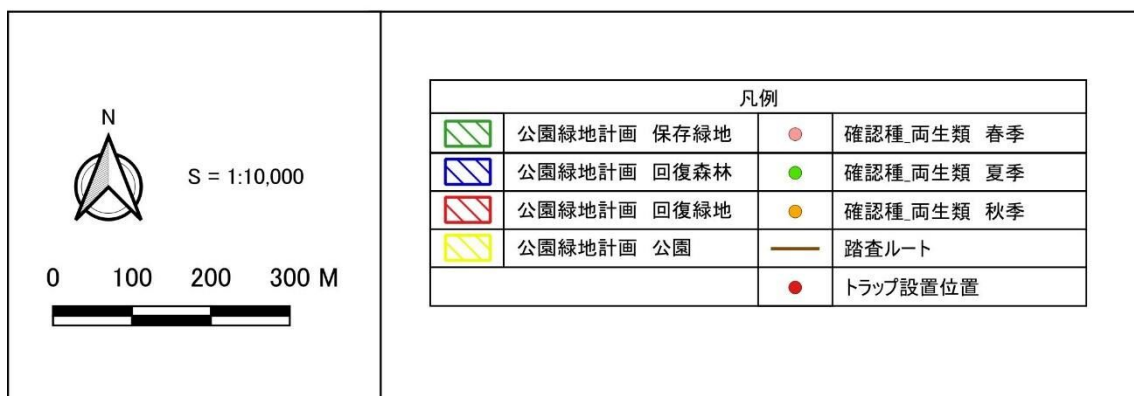
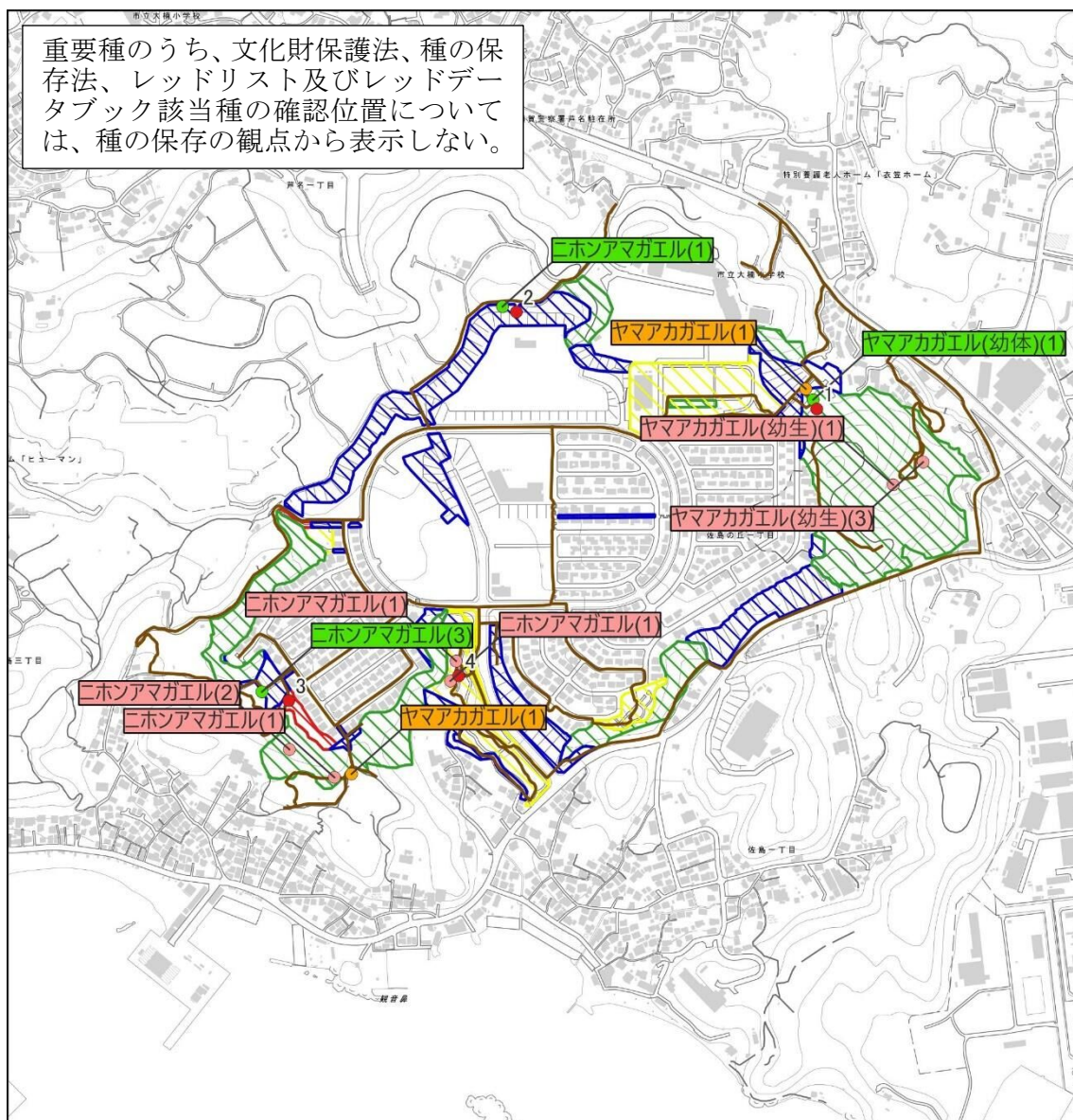


図 3.2.10 両生類確認地点

ロ. 爬虫類相調査

調査範囲において生息が確認された爬虫類は、表 3.2.24 に示すとおり合計 2 目 6 科 6 種であった。確認された地点は図 3.2.11 に示すとおりである。

確認種は、調査地域の環境を反映して、ヒガシニホントカゲ、ヒバカリ、ニホンマムシ等の平地から丘陵地にかけて広く生息する種が主体であった。

確認例が最も多かったのはヒガシニホントカゲで、幼体及び成体が各所で確認されており、調査範囲全域に広く生息していると考えられる。ニホンヤモリは、コンクリート法面の水抜き穴に潜む成体や、内部に産みつけられた卵によって確認された。確認箇所の多くは事業実施範囲外であった。

ヘビ類は、ヒバカリ及びニホンマムシの 2 種で、いずれも 1 例であったことから、ヘビ類の生息は少ないものと考えられる。

ミシシippアカミミガメは、親水公園の池、及び調査範囲東部の河川で目視により確認された。親水公園の池は、本事業の実施に伴い創出されていることから、親水公園の池に生息する個体は池の造成後に進入あるいは放流された個体と考えられる。

表 3.2.24 爬虫類確認種

No	目名	科名	種名	調査時期		
				春季	夏季	秋季
1	カメ	ヌマガメ	ミシシippアカミミガメ	○	○	○
2	有鱗	ヤモリ	ニホンヤモリ		○	○
3		トカゲ	ヒガシニホントカゲ	○	○	○
4		カナヘビ	ニホンカナヘビ			○
5		ナミヘビ	ヒバカリ		○	
6		クサリヘビ	ニホンマムシ	○		
合 計 2 目 6 科 6 種				3 種	4 種	4 種

ハ. 重要種

現地調査で確認された種のうち、表 3.2.25 に示す法令や文献・資料等により指摘されている種を重要種とした。その結果、春季及び夏季調査で表 3.2.26 に示す 6 種が確認された。このうち、環境影響予測評価書における注目すべき種として、春季及び夏季調査でシュレーゲルアオガエル、ニホンアマガエル、ヤマアカガエル、ヒガシニホントカゲ及びニホンマムシの 5 種が確認された。重要種の確認地点は図 3.2.12 に、生態情報及び確認状況は表 3.2.27 に示すとおりである。

表 3.2.25 重要種の選定基準

選定基準	
①	「文化財保護法」(昭和 25 年、法律 214 号)における天然記念物及び特別天然記念物
②	「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(平成 3 年、法律 75 号)における国内希少野生動植物及び国際希少野生動植物
③	「環境省レッドリスト 2020 の公表について」(環境省、令和 2 年 3 月)の掲載種
④	「神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006」(神奈川県立生命の星・地球博物館、平成 18 年 7 月)の掲載種
⑤	「佐島の丘開発事業環境影響予測評価書」(京浜急行電鉄株式会社、平成 12 年 12 月)において注目すべき種とされた種
	両生類：シュレーゲルアオガエル、その他のカエル類 爬虫類：ヒガシニホントカゲ、ジムグリ、ニホンマムシ

表 3.2.26 重要種（両生類・爬虫類）

No.	目名	科名	種名	選定基準				
				①	②	③	④	⑤
1	無尾	アマガエル	ニホンアマガエル					●
2		アカガエル	ヤマアカガエル					●
3		アオガエル	シュレーゲルアオガエル				要	●
4	有鱗	トカゲ	ヒガシニホントカゲ				要	●
5		ナミヘビ	ヒバカリ				NT	
6		クサリヘビ	ニホンマムシ				要	●
合計 2 目 6 科 6 種				0 種	0 種	0 種	4 種	5 種

注) 重要種選定基準及び評価区分は以下のとおりである。

- ① 特天：国指定特別天然記念物 国天：国指定天然記念物
 ② 国内：国内希少野生動植物種 特定：特定国内希少野生動植物種 緊急：緊急指定種
 ③ EX：絶滅 EW：野生絶滅 CR：絶滅危惧 IA 類 EN：絶滅危惧 IB 類 VU：絶滅危惧 II 類 NT：準絶滅危惧 DD：情報不足 LP：絶滅のおそれのある地域個体群
 ④ EX：絶滅 EW：野生絶滅 CR+EN：絶滅危惧 I 類 CR：絶滅危惧 IA 類 EN：絶滅危惧 IB 類 VU：絶滅危惧 II 類 NT：準絶滅危惧 DD：情報不足、要：要注意、減：減少種、希：希少種、注：注目種、不：不明種、LP：絶滅のおそれのある地域個体群
 ⑤ 注目すべき種